

田野のこだま

田野のこだま

朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
チュチェ113(2024)

まえがき

わが土地を持って存分に農事にいそしんでみたいというのは、長きにわたって朝鮮の農民が願ってやまなかった宿望である。

しかし、朝鮮の農民にはひとうねの土地さえもなく、あまりにも長い年月、悲惨な運命を強いられた。

特に、国を亡くしていた時代に二重三重の搾取と抑圧を受けてきた人びとが、ほかならぬ朝鮮の農民であった。

ところが、夢の中でも望んでいた朝鮮農民の願いはかなえられた。

偉大な領袖金日成（キムイルソン）主席が国を取り戻し、土地改革を実施して農民に無償で土地が分け与えられたのである。

主席は農民の世紀の宿望をかなえ、彼らにより豊かな暮らしをさせようと、一生涯農村の道を歩み続け、農民と膝を交えて農作業を相談し、生涯の最後の時期にも農場の田野に足跡を残した。

その道には、美林（ミリム）が原の農民たちと共に田植えをした忘れられない春の日もあり、日差しがじりじり照り付ける蒸し暑さもいとわず、畑のへりで干ばつを克服する方途を話

し合った夏の日もある。

　また、黄金の波うつ農場の田野を訪れ、農民と喜びを分かち合った秋の日もあり、雪に覆われた農道を歩き、翌年の農作業準備を相談した冬の日もある。

　本書は、金日成主席が全国の農村に対する現地指導の途上に残した数多いエピソードの中で一部を伝える。

目　次

夢ではない現実

1946年2月のある日。

新美（シンミ）里の村落を通り過ぎていた金日成主席は、道端のある家の前で車を止めさせ、家の庭に入って案内を請うた。

自分の前に微笑をたたえて立っている方が金日成将軍だと気付かなかった主人は、どこかの幹部のおいでだろうと思い、欣然と迎え入れた。

主人の案内を受け、狭苦しい部屋に入った主席は、貧乏にうちひしがれてきた朝鮮農民の窮状が目に浮かんできて、胸を痛めながら部屋を何度も見回した。

部屋には数枚の布団を乗せた小さな長びつがあるだけだった。

このとき、一人の幹部が幾人かの農民を連れて部屋に入ってきた。

「どうぞお楽に座ってください」

主席は、前に座っている農民に土地は持っているのか、家族は何人なのかとやさしく聞いた。

「私には土地が一坪もありません。家族は5人です」

「地主の土地を没収して土地のない農民に分け与えるという話を知っていますか」

「そういううわさは聞いていますが、それが本当かどうかは分かりません」

互いに顔を見合わせて首をかしげる農民たちを、微笑を浮かべ

て眺めていた主席は再び質問した。

「国家が地主の土地を奪って、土地のない農民に分け与えれば、それを受け取りますか」

「それはいうまでもありません。長年の願いなのに、そうなればなによりです。ところが、それがそう簡単にできるでしょうかね」

主席は、笑みをたたえてこう言った。

——農民が要請するなら、地主の土地を全部没収して、耕作する農民に無償で分与します。土地は、もとより耕作する農民のものです。ところが、今までは世の中が逆になっていて、農民が土地の主人になれませんでした。今は国が解放されたのだから、逆になった世の中を正し、農民が自分の土地を耕作して豊かな暮らしができるようにしなければなりません。

ある農民がどう考えても夢のような話なので、こう尋ねた。

「国が土地を与えるとおっしゃいましたが、私のように一坪の土地もない者にも与えますか」

主席は彼の手をやさしく取り、国ではあなたのように土地が一坪もない貧しい農民に先に土地を与えるつもりだと言った。

その瞬間、農民たちは一斉に歓声を上げた。

このとき、もう一人の農民がためらいがちに尋ねた。

「ところが、地主が再び土地を買い入れて農民に小作させるのではないでしょうかね」

——わが国では小作制度が永久になくなります。地主は二度と復活できないようになります。国では無償没収、無償分配の

原則に基づいて土地改革を実施することでしょう。

「本当に夢のようなことだな」

「よい世の中になったからには、長生きしなくちゃ」

主席は、大喜びする農民たちを見回しながら力を込めて言った。

——かつて、日本に国を奪われていた朝鮮農民は、人間以下の迫害と蔑視の中で生きてきました。しかし、解放された農民は国の主人、土地の主人となって幸せに暮らすようになるでしょう。そのような世の中が必ずやって来るということを信じ、一致団結して地主と闘わなければなりません。

農民たちは、わが土地を持ちたいという一生の願いがかなうようになったと、大いに喜んだ。しかし、彼らは、世紀を継いで望んできた朝鮮農民の念願を実現させようと自分たちを訪ねてきた方が金日成主席だとは誰も気付かなかった。

自費で払ったそば代

1946年2月のある日の昼頃。

平壌(ピョンヤン)から新義州(シンイジュ)に向かう道路を走っていた数台の乗用車が道端のそば屋の前で止まった。車から降りた長身の若い方がそば屋の庭に入った。

「このそば屋が有名だと聞いて立ち寄りました」

貧しい暮らしが感じられる部屋に入ったその方は、満面に笑みをたたえて主人にやさしく尋ねた。

「ご老人、どうしてここにそば屋を開いたんですかね」

「あまりにも貧乏な暮らしなので、野良仕事のかたわら、少しでも金を稼ごうと思って……」

「じゃ、そばを作って売ると、何か生活の助けになりますか」

「平壌と新義州を往来する人たちが少々寄ってはいますが、暮らし向きは別段変わっていません」

その方は、部屋に入っていた数人の農民と何の隔たりもなく農作業について話し合い、今や国が解放されたから、逆になった世の中を正し、農民がわが土地を持って農作を営んで豊かに暮らすようにすべきだと述べた。

生まれて初めて耳にする該博かつ面白い話に夢中になって時間の経つのも忘れていたとき、台所から食事の準備ができたという声が聞こえた。

農民たちは、地位の高い幹部に見えるその方の食事に邪魔になると思って、急いで席をはずそうとした。

ところがその方は、今日、私に有益な話を聞かせてくれた、共に食事をしながら話を続けたい、と言い、彼らを食卓に座らせた。

先酒後麺といって、随員の一人があらかじめ用意した焼酎1瓶を持って部屋に入ってきた。

その方は、そば屋の主人から始めて農民たちの杯にも焼酎を注ぎ、酒を勧めた。

「我が家にいらっしゃったお客を私がもてなすべきなのに、むしろお客からお酒を注いでもらうとはまことに申し訳ありません」

主人が恐縮するばかりでいると、その方は、彼の心をなごませるかのように豪快に笑い、次のように言った。

――今後、この村の農民が豊かに暮らすとき、また来ることにします。そば屋のおばさんの料理の腕前は見事なものですが、こんな美味しいそばをたくさん作って多くの農民たちに出すべきです。国のために仕事に励む農民が一番尊いお客です。

（農民が一番尊いお客ですって?!）

やがて、食事を終えたその方はそばが本当に美味しいと、重ねてほめたたえ、随員にそば代を払うようにと言った。

主人は、とんでもありません、どこの方かは知りませんが、絶対にそば代を受けることはできません、と辞退した。

「私は金に目がくらんだものではありません。しかも、農民を大事にしてくださる方から金を受けるなんて罪になることだと思います」

主人の真情のこもった言葉に、その方は、彼の手をやさしく取ってこう言った。

——そば代を受けるべきです。後日、ここの農民がみな豊かに暮らすとき、また来て金を出さずにそばを食べましょう。今日はぜひ代金を受け取ってください。

そうして、また来ると再び約束した。

車が遠くへ去ってから、その方がほかならぬ金日成将軍だと知らされたそば屋の主人と農民たちは膝を打って、自分自身を恨んだ。

「われわれに祖国を取り戻してくださった金日成将軍に感謝はできないまでも、自分の家で将軍のもてなしを受けるとは……」

貧しい農家に立ち寄って

1946年2月のある日。

金日成主席は、寒風が吹きすさぶ中をついて平安(ピョンアン)南道大同(テドン)郡のある村を訪れた。

主席は一見して貧しい農家だと分かる藁葺の家へ足を運んだ。

金日成主席の姿を目の当たりにした瞬間、主人はあまりにも当惑して身の置き所を知らなかった。

「将軍、国を取り戻してくださった将軍に、金の座布団を差し上げてもその恩のお返しができないのに、むさくるしいアンペラしか上げられなくて、本当に申し訳ございません」

主席は、いや、気にすることはないと言って気軽に部屋に入った。

古いアンペラを敷いた部屋は非常に狭苦しい上に、障子紙を重ねて貼ったのでうす暗かった。

しかし、心おきなくアンペラの上に腰を下ろした主席は、主人に部屋の片隅にある食卓を指しながら、食糧が足りないようだが、ジャガイモの種子は足りるかと尋ねた。

土焼きの食器には、朝子どもたちが食べ残したと見られる数粒のジャガイモがあったのである。

「将軍、ジャガイモの種子は十分です。解放前には小作料を取り立てられると常に食糧が足りなくて、しば刈りをして売ったり

出稼ぎをして露命をつないできました。しかし今は、われわれの天下になってよい暮らしができるようになったと思うと、食べなくても腹がふくれるようです」

自信に満ちている主人の言葉を聞いた主席はこう言った。

……今に自分の土地を持って豊かに暮らしてみましょう。

元来、土地は耕作をする農民のものです。

しかし、今まで長い間、世の中が逆になっていました。年中、汗水流して田畑を耕す農民には土地がなく、無為徒食する地主は多くの土地を持っている逆になった世の中を正しましょう。

ついで主席は、一人の青壮年が土地をどれほど耕すことができるのかと聞いた。

「3000坪ほどは耕せます」

主席は、土地について誰よりもよく知っている農民が土地改革で主動的な役割を果たすべきだとし、言葉を続けた。

——土地改革が実施されれば、農民が土地の主人になった喜びをもって農事に励むでしょう。土地の分与を受ければ、ひとうねも遊ばせず今年の農作を立派に営んでみましょう。

「将軍、本当に農民に土地を与えるのですか。

そうなれば、一生の念願がかなうでしょう」

主人は激情にかられて、後の言葉を続けられなかった。

土地改革法令の発布を前にして

1946年3月初めのある日、金日成主席は平安南道大同郡古平(コピョン)面のある里を訪れた。

主席の乗った乗用車は、村に入って主席の叔母の家の前に止まった。

主席が来たことを知り、村の人びとが集まってきた。

主席はアンペラにあぐらをかき、外に立っている人びとを部屋に請じ入れた。

「どうぞお座りなさい」

主席はまず、村の状況を聞いた。

当時、ここの農民の勢いは高揚していた。地主たちは3・7制闘争によって収穫の3割も納まらないのではないかと思って躍起になっていたが、農民たちは力を合わせてそれに立ち向かい、当年の営農準備を進めていた。

これを聞いた主席はとても満足し、叔父に聞いた。

「里内の土地はいかがですか。作物がよく出来ますか」

「土地もよく、作物の出来具合も悪くありません」

「里内に地主は何人ぐらいですか」

「地主がいるにはいるが、ここではほとんどが平壌市の地主の土地を小作しています」

「土地を没収して無償分配するのがよいでしょうか、それと

も分け与えられた土地の代金を年賦で少しずつ支払いながら自分の所有にするのがよいでしょうか」

「無償没収、無償分配がよいでしょう」

叔父の返答を聞いた主席は、村人を見回しながら言った。

——日本帝国主義植民地時代にわが国の農民は大変苦労をしました。今後、土地を多く分与されて農作をすれば、農民が豊かに暮らすことができるでしょう。人民政権機関の幹部が仕事をしっかり進めるべきです。

そして、人民政権機関の幹部がその機能を高め、役割を立派に果たすべきだと強調した。

「じゃ、この地帯の畑を見て回りましょう」

主席は叔母の家の後ろにある小高い山に上った。

「畑がこのぐらいなら悪くありませんね！」

農民に分与することになる畑まで見て山から下りてきた主席は、幹部たちに言った。

「もう時間もかなり過ぎたから、帰りましょう」

せっかくおいでになった主席をそのまま帰らせることが残念なので、叔母が少し休んで帰ったらと懇請したが、主席は聞き入れようとしなかった。

「後でまたお伺いします」

このように別れを告げてそこを後にした主席は、3月5日、歴史的な土地改革法令を発布した。

土地は耕作する農民に

土地改革法令が発布されると、平安南道大同郡の活動家たちも大きな歓喜の中で土地改革に取り掛かった。

しかし、誰も経験していない土地改革にいざ着手しようとすると、意のままに進まなかった。没収の対象や分配の対象もそれぞれ異なり、田畑も千差万別であったため、農村委員会の委員たちの意見もやはり食い違っていた。

そのうえ、反動派の悪宣伝にだまされて土地改革に懐疑の念をいだく農民もいた。

1946年3月のある日、金日成主席が大同郡のある村を訪れた。

「土地改革のような困難かつ複雑な仕事を受け持ったのに、私に知識がなくて力に余ります」

里農村委員長が苦衷を率直に打ち明けた。

しばらくして主席の来訪を知り、村の老人たちも集まってきた。

主席は、老人たちを前列に座るようにした後、土地改革の所感を聞いた。

「われわれ農夫は、寝ても覚めても自分の土地で農作をするのが一生の願いでした。将軍のお陰でこの願いをかなえたのだから、今死んでも悔いがありません」

老人たちが腹蔵なく自分たちの心情を打ち明け、深々と頭を下

げようとすると、主席は彼らを引き止め、こう言った。
――みなさんがこれほど喜んでいるのを見ると、私も本当に喜びを禁じえません。しかし、私がみなさんに土地を与えたのではありません。もともと土地の主人であるみなさんが自分の土地を取り戻したのです。
田畑を耕し、種を播く農民のほかに、誰が土地の主人になれると言うのでしょうか。土地は、耕作する農民のものです。
その瞬間、座中から一斉に歓声が上がった。

手ずから付けた門札

1946年3月のある日、金日成主席は平安南道大同郡のある村を訪れた。

金日成主席は、この周辺に大地主が住んでいたそうだが、その家はどこにあるのか、一度行ってみよう、と言った。

農民の膏血をしぼっていた地主の豪華な生活を見せる家屋とその周りを見回した主席は、大門をくぐって庭に立ち入った。

すると、その家で下男暮らしをしていた人びとがみな走ってきて膝をつき、大礼を上げた。

主席は、彼らを立ち上がらせ、ゆっくり中庭を通った。

ついで村の農民たちは部屋に入り、主席を中心に一家庭のように車座になった。

主席は、縁側に座っている老人たちにみな部屋の中に入ってくるようにと重ねて勧めた。

こうして、地主の家で一生下男暮らしをした老人たちも部屋に入ってきたが、彼らは地主の搾取と抑圧の中で腰を屈めて生きてきた習慣が付いて、ひざまずき、膝の上に手を置いて恐縮して座っていた。

主席は、「私の家にもみなさんのように一生野良仕事で腰の曲がった祖父がいます。遠慮なくどうぞ膝をくずして、お楽に座ってください」と言った。

万景台(マンギョンデ)の貧しい藁葺の家に生まれ、幼年時代から目のあたりにしてきた農民の惨めな生活が今までも続いていることに胸を痛めたのであった。

主席は、農民に土地を無償で分与しようとしているが、どう考えているのか、と土地の分与を受ける農民の所感を聞いた。

農民たちはその喜びをどう言い表したらよいか分からないと言った。

彼らの真情のこもった言葉を聞いて満面に微笑を浮かべた主席は、土地がどれぐらい分与されるのかと聞き、こう言った。

「……

解放前は地主、資本家が労働者、農民を搾取して暖衣飽食しましたが、解放なった今にはわが国の労働者、農民が豊かに暮らすべきであり、今後必ずそうなるでしょう」

生まれて初めて人間らしい扱いをしてもらった老人たちは目頭を熱くした。

この日、主席は地主の家で下男暮らしをしてきた一農民の名を門札に書き、それを手ずから大門に付けた。

生来の賤民としてかろうじて生きのびてきた自分が、この大きな家の主人になったことがどうしても信じられなくて、その農民は、門札に書かれた自分の名前を涙ぐんで見つめた。

主席は、その農民と連れ立って田畑に向かい、一番よく肥えた畑を選んで彼に分与するようにし、この畑の永遠なる主人にならなければならないと強調した。

あるそば屋で

1946年3月のある日。

土地改革の実施情況を把握すべく平安南道江西(カンソ)郡(当時)を視察し、帰路についていた金日成主席は、思いがけなく彰徳(チャンドク)学校時代の学友に出会った。

主席は食事でも一緒にしようと言い、彼と一緒にあるそば屋に足を運んだ。

そば屋に入った主席は、ある老人と食卓をはさんで向かい合った。

そば屋のあちこちで人びとが笑いさざめきながら楽しげに語り合っていたが、話題の大半は土地改革に関するものであった。

ある人は肥沃な田を4000坪も分与されて、夜が明けるまで村を回りながら踊りをおどったという話、40歳を過ぎた未婚の男が土地の分与を受けた上に嫁までもらう幸運に恵まれたという話……。

ところが、主席の前に座った老人は、どういうわけか、そばと焼酎の杯が食卓に出されても箸を取ろうともせず、顔をほころばせて窓外だけをじっと眺めていた。そこにはまるまるとした一頭の小牛がつながれていた。

主席は微笑みながら彼の前にそばの器を押しやりながら親しく勧めた。

「そばが伸びます。どうぞお上がりください」

「どうも。そばなんか伸びてもかまわん。今は全部わしらのもんじゃ……」

「もっともなお言葉です」

それで、興に乗った彼は、聞きもしなかったことをすらすらと言い始めた。

自分は今度金日成将軍の恩恵で3000坪の土地を分与されたこと、それで農作に励んで豊作をもたらすつもりであること、今はまだお金の余裕がなくて小牛しか買えなかったが、秋には必ず雄牛を一頭買いたいと思っていること……。

「私、きっと雄牛を買うから、いまに見てみなさい」

主席は、温かいまなざしで彼を見つめながら聞いた。

「ご老人はどこに住んでいますか」

「衣峠の向こうの村に住んでいます。今朝、衣峠を越える途中、この峠もわしらのものだという思いがするんでね。

あ、あの峠をなぜ衣峠と呼ぶのかご存じでしょうか」

主席はすでに知っていることだが、好奇心を持って話を聞いた。

……昔、大同郡をはじめ多くの郡の両班（朝鮮封建王朝時代の特権階級）たちは平壌入りするとき、平壌城の見えるあの峠で新しい服に着替えていた。平壌監司のつかさどる城内に汚い服装で入城するのをはばかっての行動だったが、そのため峠の上には常に両班たちが脱ぎ捨てた衣服があっちこっちの木の枝にかかっていた。そういうわけで衣峠という名が付いてしまった。……

衣峠の由来を説明した彼は語を継いだ。

「今朝、衣峠を越えていると、この峠も今はわしらのものなのに、私のトゥルマギ（朝鮮の外衣）も脱いで木の枝にかける気になったんです。それで着ていたトゥルマギを脱いで枝にかけておいたんです」

そばの人びとが笑いをこらえず、くすくす笑った。

「だが、峠を下りながら考えてみると、昔の両班たちは平壌監司が怖くて衣服を着替えたが、今は何も怖いものはないと思って、それであたふたと再び峠に上がってまたトゥルマギを着て下りてきたんです」

主席は豪快に笑った。周りの人たちも笑いさざめいた。

「私たちがそば屋に来て良かった。こんな面白い話をどこで聞くでしょうか」

主席はその農民に、本当に話が上手だ、もうそれくらいにして食事しなさい、と言った。

主席は食事を終えて立ち上がり、彼に別れのあいさつをした。

「われわれは先に失礼します。今年に豊作を収めて食糧を十分に蓄え、雄牛も大きいものを買いなさい」

そば屋から出てきた中学時代の学友は、主席がこのそば屋に足を運んだのは、決して昼食を共にするためだけではなかったということに気付いた。

畑のへりでの談話

1946年4月のある日。

金日成主席は、道路沿いの畑をすき返し、粟を植えている数人の農民を見て車を止めさせた。

「ご苦労さんです」

犂を取っていた農民は、言葉をかける方が金日成主席であることに気がつかなかった。

主席は、彼にここに座ってちょっと話しましょうと言い、畑のへりに腰を下ろした。

周辺で働いていた農民たちも集まってきた。

主席は、例の農民に分与を受けた土地はどれぐらいなのかと尋ねた。

「田畑を合わせて5000坪を分与されました」

「家族が何人で、土地を5000坪も分与されたのですか」

「8人です」

「土地改革が実施されましたが、今の願いは何ですか」

「金日成将軍のお陰で土地を無償で分与され、今は豊かに暮らせるようになったのに、何の願いがあるのでしょうか」

「今年の営農に種子と役牛、農機具の不足はありませんか」

「今は自分の土地があるのに、種子は農夫たちが持っているのを集めればよく、役牛や農機具は互いに借りて使えば良いんです」

よい考えだと支持した主席は、今後、国家でも援助すると鼓舞し、再び尋ねた。

「解放前には地主に小作料をどれほど払いましたか」

「解放前には1年間の収穫のうち、大半を地主に奪われました。それでも、翌年に土地を借りるには、自分は食べられなくても豚や鶏をつぶして地主に差し出さなくてはならなかったんです」

「今は土地の主人は農民ですから、現物税をどのくらい納めればよいでしょうか」

農民たちは主席の言葉が理解できず、互いに顔を見合わせるだけだったが、主席が再び質問した。

「現物税を3割にするのはいかがですか」

「国家に納める現物税を3割にすれば、農民の暮らしがよくなるんです」

「国家に2.5割を納めればいかがですか」

農民たちは再び言葉につまった。

ある農民が遠慮がちに言った。

「解放前には7割以上を地主に奪われたんですが、2.5割ならあまりにも安いんです」

手帳を取り出して何か書き込んだ主席は、立ち上がって農民たちに言った。

――今や農民が土地の主人になったのだから、土地を丹念に手入れし、農業を立派に営むべきです。そうして生活を向上させ、国家にも上質の穀物を納めなければなりません。

農民たちはただ喜びに溢れていて、主席に感謝の言葉も満足に言えなかった。

それから2カ月後の6月27日、農民が収穫の25パーセントだけを国に納める農業現物税制を実施するという決定が採択された。土地の分与を受けた農民の生活を一層向上させ、土地改革の成果を確実に保証した歴史的な措置であった。

あの方は誰だろう……

1946年10月のある日、現地指導を続けていた金日成主席は、家族と共に小豆の刈り入れをしている農民を見た。

主席は車を止めさせ、農民に近寄った。

「ご苦労さんです。刈り入れをしていますか」

「ええ」

「営農状況をお聞きしたいんですが、ちょっと時間を割いていただけますか」

「時間などかまいませんが、どうぞお聞きください」

栗の木の下へ歩を進めた主席は、木の葉を敷いて腰を下ろし、農民と話を交わした。

「今年の作柄はどうですか。分与された土地はどれぐらいですか」

「金日成将軍のお陰で1500坪の水田と6500坪の畑を分与されました。今年の作柄も上々でした」

「小川のほとりのあの牛はお宅のものですか」

「そうです」

「だから、家計を立てるのは問題ないでしょうね」

主席は、今やわれわれの手でわれわれの生活を築くときが来た、農民が農作を立派に営んでこそ、人民がさらに裕福になり、国も富強になるのだ、と言った。

そして、畑に目をやりながら尋ねた。

「土壌は粘土質のようですが、ここの土地は全部同じですか。畑には主に何を植えていますか」

「トウモロコシを植えています」

「ここではトウモロコシがよく出来ないようですが、その原因は何でしょうか」

「ここの耕地はもとより強い粘土質で、雨が少し降ってもどろどろになり、また少しでも降らないと固くなって困りきっています」

農民のこぼす愚痴に、主席は微笑をたたえ、懇々と諭した。

「そうですか。それでは溝を掘ってみなさい。溝を処々に深く掘っておけば、冷害を防ぐことができます。そして、日照りが続くときには何回も中耕をし、草取りもたびたびすれば、土地がやわらかくなります。

働き者の百姓にやせ地はないと言われているように、穀物は人の手が加わるほどよく出来るものです」

農民はひそやかに顔を赤らめた。

主席は、今は農民が土地の主人であるだけに、この粘土質の畑をよく肥やさなければならない、牛車も持っているから便利だろう、草をたくさん刈って腐らせ、邑に行って焚口の灰も多く運んで来れば、他人よりたくさんの堆肥を施すことができるだろう、と言ってこう付け加えた。

——堆肥をたくさん施すならば、土地もかなりやわらかくなり、穀物もよく出来ます。除草も丹念にすべきです。畑に雑草

があれば穀物の出来によくありません。あそこに小川もあるから、排水に有利でしょう。

「お言葉通り、来年には農作を立派に営みます」

「夕方には建国室に行きますか」

「ええ。毎晩、建国室に集まって選挙に関する宣伝を聞きます」

主席は、それはよいことだ、農民が国の主人になったからには、政治も知るべきだ、そうしてこそ、わが国がどういう状況にあり、何をしているのかを知り、農作業も子育ても立派に行うことができる、と言った。

そして、農民の節くれ立った手をやさしく取り、別れのあいさつをした。

去って行く乗用車を眺めながら農民はその場に立ち尽くしていた。

(中央の幹部に違いないが、本当に農事に明るい方だな。私はこれまで、乗用車に乗る幹部が、取るに足らぬ農夫と分け隔てなく農事について話し合うことを見た覚えがない。果たしてあの方は誰だろう?!……)

農民代表の感激

解放の翌年、朝鮮では例年にない大豊作を収めた。

全国の農民は、土地改革のお陰で初年度に豊作をもたらした喜びを抱いて、現物税先納運動に立ち上がった。

そうした1946年11月、道内の現物税先納運動の首位を占めた平安北道宣川(ソンチョン)郡新府(シンブ)面(当時)の農民代表たちは、金日成主席に送る感謝文と贈物を持して平壌に上京した。

「遠路はるばるご苦労さんでした」

あれほど欽慕してやまなかった金日成将軍にお会いできた感激と興奮に包まれて、代表たちは何から先に言ったらよいのか戸惑っていた。

やがて、代表の一人が丁重に襟を正し、金日成主席に感謝文を渡しながら言った。

「私たちは平安北道宣川郡新府面の農民を代表して、金日成将軍に感謝の気持ちを伝えるために参りました」

そして、日本帝国主義に奪われていた国を取り戻し、農民を土地の主人にしてくださった金日成将軍の大いなる恩恵に報いようとする一念で働き、農業現物税先納運動で首位を占めた自分たちの自慢話をした。

金日成主席は彼らを見回してこう尋ねた。

「今年の営農状況はいかがですか」

「将軍のくださった土地で農作がうまくいって、例年にない大豊年を収めました」

ある農民代表の答えを聞いた主席は大いに満足し、彼らをほめたたえた。

——仕事を立派に行いました。今われわれは、日本帝国主義のあくどい植民地支配の悪影響と封建の残滓を清算し、新しい民主祖国を建設しています。

現在、重要なのは建国事業に励むことです。

建国事業で農民は人民政権をさらに強固にし、農業を立派に営むべきです。穀物を多く生産し、綿花を多く植え、まゆを多く生産し、畜産も着実に行わなければなりません。みなさんは帰ったらこのような仕事に力を入れるべきです。

私も力と情熱を惜しまずに建国事業に注ぐつもりです。

みなさんが力と情熱、知恵を全て出し合って団結すれば不可能なことはありません。富強で暮らしよい民主国家を建設しましょう。

農民代表たちは驚かざるを得なかった。

自分たちに土地を分与してくださった金日成将軍に心から感謝するのは、この国の農民の当然の道義なのに、むしろ国のためにより多くの仕事をすると約束してくれるのだから、この世にあれほどおおらかで謙虚な方がどこにおられようか。……

自ら農家を訪ねて

1947年4月のある日のことである。

この日、金済元(キムジェウォン)農民の家庭を訪れた金日成主席は、村の名称や農家の戸数など生活状況について具体的に聞き取り、こう尋ねた。

「どのようにして3600坪の水田で140俵の籾米を生産できたのですか」

「自給肥料を多く作って水田に施し、葦を刈って水田に埋めて塩気を防止したら、収穫が上がりました」

主席はそれこそ立派なことをしたと称賛し、こう続けた。

――わが国に「勤勉な農夫にやせ地はない」ということわざがありますが、それはご老人にふさわしい言葉だと思います。

穀物の収量を高めた立派な経験をこの地方の農民はもちろん、他の里の農民にも教えるべきです。今後農民たちは、青草を刈り、畜産も行ってより多くの堆肥を水田に施さなければなりません。

主席はいつくしみ深いまなざしで金済元農民を見つめながら、農家で家畜を多く飼っているのかと尋ねた。

「牛や豚、鶏を飼っています」

「農家では畜産を行うべきです。……ご老人が模範になって、この村の全ての農家で牛、豚、鶏、犬などの家畜飼育運動

を繰り広げなければなりません」

小窓を開けて村の全景を眺めていた主席は、村を住みよいところに整えなければならない、今日この村に来てみると、藁葺の家が多く、道が曲がりくねっていて見栄えがしない、瓦葺の家を多く建て、道路もよくつくって村をきれいに整備しなければならない、と語った。

「将軍が全てのことを一つ一つ教え、難問を解決してくださったのですから、今後、きっと農業を立派に営んで将軍の恩恵に報います」

主席は微笑を浮かべ、もう帰る時間になったとして立ち上がった。

金済元農民は主席の手を握って切々と言った。

「将軍、せっかくおいでになった将軍をこのまま帰らせますと、この金済元の胸に悔いが残ります。ほんの気持ちだけですが、わしらの誠意がこもった食事を召し上がってください」

主席はそう言う彼に、誠意はありがたいが、忙しくて帰らなければならないとし、あまりに残念に思わないでくれと語った。

「ご老人をはじめ家族のみなさんの健康と今年度の大豊作を祈ります」

「将軍！」

金済元農民とその家族は感激して目頭を熱くした。

農民たちと共にした田植え

1947年6月のある日のことである。

明るく澄み渡った早朝に美林が原に到着した金日成主席は、農民たち一人ひとりの手を握り、あいさつを交わした。

主席は農民たちを見回して、朝早くから共に楽しく仕事を始めようと言い、田植えをする水田に向かった。

「将軍が自ら田植えをしに来られたんですって?!」

農民たちは目頭が熱くなるのをどうすることもできなかった。

「分与された土地でみんなで楽しく田植えをしてみましょう。祖国に帰って初めての田植えです」

明るい笑顔で上着と靴を脱いだ主席は、真っ先に水田に足を踏み入れた。

水田に苗束を均等に散らしながら他の人たちがみな水田に入るまで手を休めなかった主席は、苗束を一つ手に取って解き、田植えなわに合わせて丹念に苗を植え始めた。

主席は、少し休むことを勧める農民たちに、われわれは田植えをしに来たのだから、めいめい自分の責任分を果たすべきではないか、もうちょっと植えてから休むことにしようと言って苗を植え続けた。

「……苗を丁寧に扱うべきです。

……農民たちの汗が滲んでいるものですから、一株一株入念

に植えるべきです。」

　主席の言葉を聞いて、苗を植えていた人たちはもちろん、苗束を運んで水田に投げていた人たちも苗束を丁寧に扱った。

　主席は楽しい雰囲気が漂う田野を眺めながら、こう言った。

　「農民は農作業を几帳面にしなければなりません。わが国の農民は、かつては土地の主人となることができなくて、いくら精を出して農作を営んでも、穀物を全て地主に奪われ、空腹をこらえて貧しく暮らしましたが、今は土地の主人になったのですから、農作に励めば何の心配もなしに豊かに暮らすことができます。農作を立派に営んで食べ物が豊富になってこそ、暮らし向きが楽になり、建国事業も円滑に行うことができます」

　主席は、土地をよく肥やして美林が原を沃土に変え、田畑をきちんと整えるべきだと強調した。

　主席は、この日に計画した水田の田植えを全部終えてから仕事の手を休めた。

小麦の束を抱いて撮った写真

1947年7月のある日、金日成主席は現地指導の途上、道路沿いの畑で小麦の刈り入れをしている農民夫婦を見て車を止めさせた。

彼らから小麦の穂を一つ受け取った主席はやさしく尋ねた。

「小麦の作柄が上々ですね。どれぐらい収穫できそうですか」

「50坪に一俵は取れると思います」

農民の答えを聞いた主席は、重ねて小麦の作柄が上々だとほめ、また尋ねた。

「土地改革のとき、土地をどれほど分与されましたか」

「金日成将軍のお陰で4500坪の畑と1500坪の水田を分与されました」

主席はちっぽけな水田や畑を指差して聞いた。

「この土地も分与されたものですか」

「いいえ、草地だったのを水田と畑に開墾しました」

主席は彼らの労をねぎらい、随員たちの方へ振り返って言った。

「今では農民たちが土地の主人になりました」

主席はついで、ここに空閑地が多いのかと尋ねた。

その農民は遊んでいる土地が少しあったが、全部すき返したと答えた。

——ひとうねの土地も遊ばせてはなりません。農民には土地が

なければならず、農業を立派に営んでこそ国が栄えるものです。

「今農民たちはみな、素晴らしい世の中になったと喜んでいます」

主席は明るく笑い、農民の後ろに立っている彼の妻に、解放された国で女性たちも男子と同等の権利を持って農業を営んでいる気持ちはどうなのかと聞いた。

「将軍、気楽に休み、思う存分働くのだから、疲れを覚えていません」

「疲れを覚えないんだ。……」とひとりごちた主席は、語を継いだ。

——新しい社会の建設における女性たちの地位と役割は極めて重要です。革命の片方の車輪を担当しなければなりません。

「将軍のお言葉を肝に銘じて力一杯働きます」

「さあ、あの小麦の束を抱いて立ちなさい。写真を撮りましょう」

主席は感激を抑えられずにいる農民夫婦に懇ろに言った。

——解放された祖国で国の主人、土地の主人になった農民の本分は農業を立派に営むことです。土地を与えた国の恩恵を忘れず、農業に力を入れなければなりません。

数日後、主席が小麦の束を抱いて撮らせた女性農民の写真は、男女平等権法令発布1周年を前にして、道の新聞に大きく紹介された。

農民との約束

1947年8月のある日、金日成主席は秘書から、江原（カンウォン）道平康（ピョンガン）郡玉洞（オットン）里に住んでいる一女性農民が訪ねて来たという報告を受けた。

しばらくして彼女が幹部の案内を受けて部屋に入ってきた。

主席は明るい笑みを浮かべ、節くれ立った彼女の手をやさしく握った。

「遠路はるばるご苦労さんでした」

彼女は、主席が自分のように平凡な農民に会ってくださると、あまりにも恐縮してどうしたら良いか分からずにいた。

主席は彼女に尋ねた。

「どうしてここまで来られましたか」

「将軍がくださった土地で自分の手で刈り入れた小麦とジャガイモを持って参りました。多くはありませんが、私の気持ちですから受けてください。一昨年まで他人の下女として働いていた私が、将軍のお陰で、今日は自分の家を持って自分の土地で農作をし、胸を張って暮らすようになりました」

主席は彼女の手を取って椅子に座らせて聞いた。

「今年の作柄はいかがですか」

「将軍がくださった土地を丹念に手入れし、力一杯働いた甲斐があって、今年の作況も上々です」

土地を分与され、みなが土地の主人になってからは何の心配も

なしに楽に暮らせるようになったという彼女の話を聞いた主席は明るく笑った。

主席はふと、学校について質問した。

「そこに何の学校がありますか。中学校がありますか」

「人民学校が一つあるだけです」

すると主席は懇ろに言った。

「私に穀物を持ってきたのも感心なことですが、学校や会議室の建設に使ったらもっと良かったでしょう。全ての農民が農業を立派に営む一方、力を合わせて学校を建て、子どもたちを立派に教育しなければなりません。里にも中学校を一つ建てて、子どもたちを自分の里で中学校まで卒業させなければなりません。

子どもたちは学校が遠くて中学校を卒業できないと言っていますが、各里に中学校を一つずつ建てるべきです」

しばらくして主席はまた彼女に聞いた。

「あなたはどんな学校を出ましたか」

「学校に通ったことがありません」

「それでは、あなたは今何の勉強をしていますか。……新聞は読んでいますか」

彼女は顔を赤くしてうつむいたまま、スカートの裾だけをまさぐった。

「将軍、私はまだ読み書きができません」

主席は早く読み書きを学ぶべきだとしてこう言った。

「朝鮮人はみな、朝鮮語の読み書きができなければなりま

せん。そのためには勉強をしなければなりません。

わが国の女性たちはやり方を知らなくて勉強できなかったのではなく、日本帝国主義者のせいで勉強できませんでした。

あなたは今からでも遅くないから読み書きを習いなさい。できるでしょうか」

「はい、きっと勉強します」

「では、私と約束しましょう。帰って読み書きを習い、3カ月後には自筆の手紙を私宛に寄こしてください。どうでしょうか」

「はい、必ずそうします」

「あなたが読み書きを習い、全ての人に識字運動を繰り広げるよう呼びかけてみなさい。分かりましたか」

「はい、将軍との約束通り識字運動をさらに力強く展開するようアピールします」

それから3カ月後、主席は一通の手紙を受け取った。

手紙を読んでいた主席は明るい微笑を浮かべた。

例の女性農民が主席に送った手紙である。

その手紙には、あらゆる搾取と圧迫を受けながら無知と貧しさの中で暮らしてきた自分を国の主人、土地の主人に押し立て、幸せな生活を送るようにしてくださり、今日はこのようにこの世に生まれて初めて自分の手で手紙を書けるように育ててくださった金日成将軍への限りない敬慕の念を込めて、謹んで感謝をささげるという内容が書いてあった。

数日後、主席は彼女に、約束通りに3カ月間に読み書きを習い、

手紙を書いてその便りを寄こしてくれたことをうれしく思うとし、今後、仕事にもっと精を出し、勉強も一生懸命にして新しい成果を収めることを望むという内容の返信を送った。

　このときから、全国に識字運動の炎が激しく燃え上がった。

引き下げた用水代

1947年8月のある日、安州（アンジュ）郡新安州（シンアンジュ）面（当時）の活動家たちは現地で金日成主席に呼ばれた。

主席は面党委員長に尋ねた。

「今回の大雨で農作物の被害はなかったんですか」

「清川江（チョンチョン）周辺の一部の田畑が冠水しましたが、今は水が引いて大丈夫です」

主席は水浸しになった痕跡がそのまま残っている水田を指差して言った。

——灌漑体系も重要ですが、それに劣らず排水体系を正しく立てる必要があります。水の管理がどれほど重要なのか、これを見ても分かるでしょう。

面の活動家たちが排水体系に関心を払ったなら水害を未然に防ぐことができたのにと自責の念にかられていると、主席は面党委員長に聞いた。

「今年の作柄はいかがですか」

「上々です」

「畑作もよく出来ましたか」

「ええ、畑作も上々です」

——農業を立派に営むには、初春からまめに堆肥も出し、勤勉に働いてこそ高い収穫を収めることができます。

ついで、農民たちの生活状況を聞き取った主席は、深い思いを込めた語調で尋ねた。

「今、農民たちの反響はどうですか」

「農民たちは土地を分与された喜びを抱いて農作業に励んでおり、将軍の恩恵に報いるために真心込めて選んだ穀物を愛国米として国に収めています」

主席は面党委員長に、用水代は高くないのかと尋ねた。

当時、土地を分与された農民たちは、清川江から汲み上げた水を使って干害を知らずに思う存分稲作をしており、用水の代金を払っても食糧の余裕は十分であった。

「用水代は高くありません」

主席は随員たちに、用水代が少し高いようだが、引き下げなければならないと言った。

——土地の主人になった農民の生活を一日も早く向上させなければなりません。

主席は、農民たちを土地の主人として押し立てながらも、高くもない用水代をもっと引き下げるよう措置を取るようにしたのである。

2頭の牛と折合案

1947年8月のある日、金日成主席は江原道安辺(アンビョン)郡のある農民に会った。

「遠いところからご苦労さんでした」

主席は丁重にあいさつをする彼の手を取って席を勧めた。

浅黒く日焼けしたその農民の顔を見つめていた主席は、やさしい語調で言った。

——あなたは、土地改革のお陰で暮らしがよくなったとして、家で飼っていた2頭の牛を平壌まで汽車で運んできて国に贈ると言っているそうですが、その真心は大変ありがたく思っています。

主席の過分な賞賛に、農民は恐縮して身の置き所を知らずにいた。

主席はその彼に情のこもった目を向けて言った。

「ところが、現在あなたの家に牛がありますか」

「家で飼っていた牛を持ってきたので、今はありません」

「じゃ、今後牛もなしに営農はどうするつもりですか」

「同じ村に住んでいる父の家と叔父の家に牛がありますから、いくらでも農作業はできます」

主席は、もちろん父親や叔父の家にある牛を交互に使いながら農作を営むこともできるだろう、だが、自分の家の牛は国に贈り、一家親戚の援助を受けて耕作をしようとしたのはよい考えで

はないようだ、と言って語を継いだ。

——あなたのように農民がわれ先に牛を国に贈ろうとばかりすれば、農業はいかに営むでしょうか。あなたの行動はありがたいことですが、もう一度よく考えてみるのがよさそうです。

軽く諭す主席を仰いで農民は切々と言った。

「牛を国に贈るのは、私だけではなく一家親戚の一致した願いですから、牛を持って家に帰ることはできません」

主席は、どうしてもと言うなら自分と一つ約束をすることができるかと聞いた。

「将軍が望む約束なら、何でもできます」

——あなたが今年中に小牛を2頭飼うと約束するなら、持ってきた牛を受け取ります。

「将軍にお会いするために平壌に向かうとき、父の家にある大きな小牛を私の家で飼うという話がありました。また、叔父の家にある牛は秋に子を産みますが、それを持ってくれば2頭の小牛を飼うのは問題ありません」

彼の話を聞いた主席は明るく笑いながら言った。

——それでは、あなたの一家親戚の愛国至誠のこもった2頭の牛をありがたく受け取ることにします。

農民はぱっと立ち上がった。

「私たちの小さな誠意を愛国至誠としてほめてくださって、まことに恐縮の限りです。本当にありがとうございます」

このように金日成主席が出した折合案によって、安辺郡の2頭の牛は平壌に残されるようになった。

山村で過ごした一日

1947年9月のある日、陽徳(ヤンドク)郡の某発電所を視察して帰途についた金日成主席が陽徳郡温泉(オンチョン)面のある里に入ったときは、秋の夕陽が西山に沈みかけていた頃であった。

その里には深くて険しい谷間が９つもあり、その中でもいちばん奥まったところにクジ谷と呼ばれる村があった。主席はこの険しいクジ谷に向かって出発した。

つるが絡み合って一寸の先も見えないほどうっそうとした樹林の中にくねくねと曲がった果てしない小径に沿ってずいぶん歩いていくと、みすぼらしい一軒の家が見えた。

主席はその家の庭に入り、70歳そこそこの老人にあいさつをした。

「ちょっと用事があって立ち寄りました。ご老人、こんな山奥で苦労が多かったでしょう」

「私なんかに苦労なんて……。国事をつかさどる幹部がこんな僻地まで訪ねてくれて、本当にお疲れ様でした」

「ご老人、いつからここに住んでおられるのですか」

「日本人の搾取がますますひどくなり、生活難が極度に達したので、この山奥に深く入るとあいつらの顔を見なくても済み、ここで焼畑でも起こしたら生活が少々良くなるのではと思って、ここに入ってからずいぶん年月が流れました」

主席は、老人のひび割れがし、節くれ立った手をやさしく撫でた。

「ご老人、お宅で一晩休ませていただけませんか」

「ええ。しかし、家があまりにもむさくるしくて……。とにかく、どうぞお上がりください」

この日、主席は老人と膝を交えて話を交わした。

「ご老人、分与を受けた土地はどれほどですか」

「6000坪の焼畑と600余坪の平地の畑を分与されました」

「土地の分与を受けて農作を営んでみると、どうでしたか」

「何よりも、解放なって日本人がこの地から追いやられたし、また金日成将軍のお陰で土地の分与まで受けて、今はわが土地で存分に農作を営むようになったので、胸を張って暮らしています」

喜びに溢れている老人に、主席は再び尋ねた。

「この地方では主にどんな穀物がよく出来ますか」

「ここでは主に粟とジャガイモを植えていますが、もとより土地がやせていて農作がかんばしくありません」

——このような山間部のやせ地も堆肥を多く施せば沃土になります。勤勉な農民には土地のよしあしがありません。

主席が今後は肥料もさらに多く供給すると言うと、老人は大いに喜んだ。

「ここにはどんな山菜と果実が多いんですか」

「ヤマブドウとサルナシ、ヤマナシなどの野生の果実がたくさんあり、山菜としてはタラの芽やミツバヒカゲゼリ、ワラビ

とキキョウ、ツルニンジン、オケラなどが多いです」

主席は、山をひかえているところでは山を効果的に利用し、海をひかえているところでは海を効果的に利用すべきだとし、こう強調した。

――ここにはヤマブドウやサルナシ、ヤマナシのような野生の果実が恵山（ヘサン）や江原道よりはるかに多くあります。また、ここの山には各種の山菜がいっぱいあり、薬草もたくさんあります。季節ごとに果実と薬草、山菜をたくさん採ってよく利用すれば、大した元手をかけなくても多くの収入を得ることができるでしょう。

「お話をうかがっていると、あの山が全部お金の山のように見えますね。ところが、そんな耳寄りな話をこの村の者たちにも聞かせていただけませんか。それを聞くなら、みんなはっとするでしょう。世情に通じているお宅はどこの生まれなんですか」

主席は笑って言った。

「私も平安道の農村で育ちました」

「うむ、どうやら農業に明るい方だと思いました。お宅のような農村生まれが当然、郡を導くべきです。でなければ、天下の大本である農業を正しく指導することができません」

いつの間にか夕方になって、主席は食卓をはさんで老人と向かい合った。

食卓に載せられた料理が自分の家のものでないことに気付いた老人は、すまない気がして身の置き所を知らなかった。

「これは本当に申し訳ございません。主人がお客をもてなす

べきなのに、かえってお客が主人をもてなすなんて、本当に恥ずかしい限りです」

「ご老人、とんでもないことです」

このとき、温泉面人民委員会委員長がいそいそと駆け付けて来て、扉の前でお辞儀をした。

「将軍、お元気ですか。私はこの面の人民委員長です」

面人民委員長を部屋に請じいれ、床に座らせる主席を仰ぐ老人の顔は瞬時にかたくなった。

「将軍、本当に申し訳ございません。将軍に気が付かなくて……」

「ご老人、そんなことは言わないでください。ご老人が天下の大本である農作について話したのに、かまうものは何もありません。私もこの地方の状況を把握すべきではありませんか」

しばらくの間、感激して目をうるませていた老人は、ポケットから手あかのついた小さな手帳とちびた鉛筆を取り出し、何かを書き込んだ。

「将軍、ここに金日成将軍が私の家を訪ねてきたと書き記しました。これをあの子たちに譲り渡します」

「ご老人、それよりも全ての山から黄金を取り入れようと書いて子孫に譲ってやりなさい」

老人は今一度大いに感激した。

「この老いぼれは、もう死んでも心残りがありません。金日成将軍をお迎えしたこのうれしい日にどうしてじっといられるでしょうか」

ぱっと立ち上がった老人は、両手で膝を叩きながら肩踊りをおどり始めた。

一生、歌と踊りを知らずに生きてきた彼に、笑いと楽観、喜びを抱かせてくださった方はほかならぬ金日成主席であった。

主席が示した黄金の山の新しい歴史と共に、枯れていた老人の人生にも春が訪れてきた。まさに、それは躍動するクジ谷の新しい姿であった。

6羽のホオジロ

1948年1月のある朝。

ある山村の農家の前に1台の乗用車が止まった。

朝食を済ませて部屋に座っていた主人がどうしたのかと思って、戸越しに目をやっていると、よく響く声が聞こえてきた。

「ごめんください」

主人が戸を開けると、一行のうち若い方が言った。

「通りすがりに、少し暖を取りたいと思って立ち寄りました」

「どうぞお上がりなさい。でも部屋がむさくるしくて……」

部屋に入ったその方は、座って話しましょうと言い、解放前に比べて暮らし向きはどうなのかと尋ねた。

「わしらのような農夫には本当に住みよい世の中です」

「何がよいのですか」

「よいのはたくさんあります。まず、自分の土地で農作を営むから地主の顔色をうかがわなくても済むのでよいし、地主を追い出してから彼らに何も奪われず、暮らしも楽になったのでよいのです。本当に今はご飯を食べるとそのまま養分になり、気が休まって枕を高くして眠ります」

その方は、もっともな話だとうなずき、食糧や衣服は不足しないのか、よそ行きのトゥルマギはあるのか、寝具は十分なのか、といちいち尋ねた。

食糧は十分だが、まだ衣服や寝具などはさほど準備できなかったと主人が答えると、その方は、もう新しい世の中になったのだから、一生懸命に働いて営農で成果を上げると豊かに暮らすことができるとし、今後幸せに暮らせる方途を具体的に説明した。

（若いのに細心な方だな。山間部の農夫の暮らしにあんなにやさしく気を配るこの方はいったい誰だろう）

部屋の中を見回していたその方は、子どもたちが捕えたという片隅の鳥籠にあるホオジロを見て、本当によい鳥だ、何羽もらえないだろうか、と聞いた。

「まあ、ありふれたホオジロをなぜ差し上げられないでしょうか」

その方は、隣の村に行って帰り道に持っていくとし、席を立った。

「冷えた体がよく暖まりました。お世話になりました」

お客たちを見送った主人は、若い方をどこかでお目にかかったような気がして、記憶をたどった。

ふと、新聞で見た金日成将軍の写真が脳裏をかすめたが、国の政事をつかさどる将軍がこの山奥の農家にまで訪ねてくるはずはないと思って，すぐにかぶりを振った。

だが、どうしても腑に落ちなくて隣の村に駆け付けた彼は、先ほど自分の家を訪ねた方があれほど敬慕してやまなかった金日成将軍であることを知り、腰が抜けたように座りこんでしまった。

（あ、私はまったくの間抜けものだな。解放されて3年目になった今まで金日成将軍に気付かないなんて……）

家族にこれを知らせようと家に駆け戻った彼は、妻からさらに

驚くべきことを聞かされた。

帰り道に再び彼の家に立ち寄った金日成将軍が、約束通り6羽のホオジロを持っていきながら、多額のお金の入った封筒を子どもたちに渡したということであった。

そのときになって、山村の農家に立ち寄って生活状況を確かめた将軍がどうしてありふれたホオジロを持っていくと言われたのか、そしてそのお金が単なる鳥の代金でないことを悟った主人は、封筒をつかんだまま外へ駆け出した。

彼はとめどなく涙を流しながら、主席の立ち去った方に向かって潤んだ声で叫んだ。

「将軍！　本当にありがとうございます！」

一生の願いを果たした老人

1948年5月のある日。

現地指導を続けていた金日成主席は、昼どきになると、平安南道大同郡のある貯水池に到着し、随員に持ってきたもので昼食を準備するようにした。

そして、この地方の老人たちを何人か招いた。

主席は老人たちに、話も交わし、昼食も共にしようと思って招いたとやさしく言った。

「これは恐縮の至りです」

「ご老人、ここで昼食を共にしましょう。支度したものは多くありませんが、どうぞ召し上がってください。

このように外で昼食をとれば、同じ料理でも格別においしいのです」

料理を勧めた主席は、彼らと話を交わしながら、この地方の土地改革の状況を確かめ、暮らしの様子についても質問した。

「ご老人、子どもは何人ですか」

「幼い二人の息子と一人の娘がいます」

「なぜそんなに子どもが少ないのですか」

「下男暮らしをして40歳を越してやっと妻をめとったのです」

ついで主席は、そばに座っている老人に尋ねた。

「ご老人は子どもが何人ですか」

「二人の息子しかいません」

「どうして二人の息子しかいないんですか」

「解放前に妻が薬の一服も飲めずに亡くなったので……」

その老人が言葉じりを濁すと、主席は、みなさんは本当に苦労が多かったと胸を痛め、今は労働者、農民が国の主人に、土地の主人になったのだから、全ては人民のものだ、それゆえ、子どもたちをみな大学の勉強までさせて国の立派な柱に育てなければならないと言った。

その言葉にぱっと立ち上がった老人は、頭を下げて感謝した。

「大学の勉強は望めなくても、中学校でも卒業させたいのが私の一生の願いです」

主席はその老人の息子に会い、こう強調した。

「この子どもたちをきっと大学にまで送りなさい。きっと……」

「将軍、本当にありがとうございます」

「ご老人、お元気で長生きしてください。息子さんを必ず大学に送らなければなりません」

重ね重ね念を押してそこを後にする主席を仰ぎ、その老人は一生の願いをかなえてくれた主席に感謝もろくにできないまま肩を震わせるばかりであった。

農家に立ち寄った理由

1948年5月のある日、金日成主席は南里(ナムリ)村はずれのある農家を訪ねた。

農家の老人とあいさつを交わした主席は、暮らし向きを尋ねた。

「お宅では土地の分与を受けた後、暮らしが少しは良くなりましたか」

「もちろん、良くなりました」

こう答えた老人は、家族は7人であるが、働き手は4人もいる、だから多くの畑を分与されて食糧の心配をしない、牛や豚など家畜が多くて地主が見るとびっくりするだろう、と興に乗って言った。

うれしさを隠しきれない彼を眺めながら微笑んでいた主席は、豚小屋に足を運んで70～80キロにのぼる豚を見て、この豚を飼ってはどうするのかと尋ねた。

「家でつぶして食べたり、売ったりします」

——そうするより消費組合に売り、食べたいときに少しずつ買うのが良いと思います。家で屠殺するなら、そのときは食べても、そうでないときは食べたくても食べられないでしょう。

こう言って台所に入り釜の蓋を開けてみた主席は、驚きの色を隠せなかった。

「雑穀のご飯を作ったのを見ると、食糧が足りないようですね」

「いいえ、家族たちがトウモロコシを交ぜたご飯を食うと力が出ると言ったので、家内が今日に限って作ったのです。倉に米がいっぱいあります」

「じゃ、その米を見せていただけますか」

老人は米がいっぱい入っているかめの蓋を開けた。

かめの中をのぞいた主席は、やっと安心したように満面に明るい微笑を浮かべた。

このとき、老妻が急いで走ってきてあいさつすると、主席はやさしく言った。

「女主人もいないのに、倉の米かめを見せてもらいました。

さあ、お体に気を付けてください。私たちはこれで失礼します」

「将軍、こんなに早くお帰りになられるとは……」

せっかくおいでになった主席を部屋に案内できなかったことを残念に思いながら主席を見送る老夫妻は、わけが分からず互いに顔を見合わせた。

「おまえ、将軍がなぜ我が家に立ち寄ったのかな」

「そうですね」

主席が農繁期の農民の食糧事情を確かめるべく、多忙な時間を割いて自分たちの家に立ち寄り、不自由なく暮らす農民の家を見たのがそんなにうれしくて、楽しい気持ちで村を離れた経緯を彼らは知るよしがなかった。

50余人家族を持った老人の福運

1948年6月のある日、金日成主席が乗った車は吉州(キルチュ)郡のある村の曲がった小道に入った。

狭い道は車の運転にとても不利であった。夜通し降り続けた雨によって道は非常にぬかるみ、先頭で走っていた車の車輪がぬかるみにはまり込んだ。

随員たちと共に車を押した主席の靴は泥だらけになった。

それを見た随員の一人が主席に言った。

「将軍、靴に泥がたくさんついています」

主席は、おまえの靴もやはり同じだとし、言葉を継いだ。

——君たちは私の靴に泥が付いたと心配していますが、大丈夫です。農民は一生を土まみれになって働いているのに、農村に出たわれわれの靴に泥が付いたとして心配することは何もありません。農民を訪ねていくには靴に泥が付くものです。

主席は、道そばの最初の家の庭に入り、縁側に座っている老人に「ご老人、お元気ですか」とあいさつした。

「おや、金日成将軍が？」

老人はせわしく立ち上がって主席にお辞儀をした。

「この村に住んで久しいですか」

「ええ、生まれてからここで住んでおります」

「ご老人の家でも土地の分与を受けましたか」

「将軍の大いなる恩恵で、生まれて初めて自分の土地を持って農作を営んでいます」

「それがどうして私のお陰だと言うのでしょうか。みなさんが自分の土地を持つようになったのはよいことです」

そして、今の生活は解放前に比べてどうなのかと尋ねた。

老人は、解放前に作男暮らしをしてきた自分の家庭が解放なって息子、娘、孫、孫娘を合わせて50人余りにもなるが、就学年齢の子どもたちはみな学校に通うなど、こんなよい世の中がめぐってくるとは夢にも思わなかったと答えた。

主席は、息子、娘、孫、孫娘が50人余りにもなるのは素晴らしいことだ、本当によいことだ、と豪快に笑いながら言った。

——農民がみな土地の分与を受けて豊かに暮らせるようになり、子どもたちはみな学校で勉強するようになりました。

……その子どもたちを存分に勉強させて国の頼もしい働き手に育てなければなりません。

「ありがとうございます」

「ご老人、よい世の中で長生きしてください。じゃ、これで失礼します」

「将軍！

くれぐれもご安泰を祈ります。思うに私のように福運に恵まれた者はこの世にまたといないでしょう。いや、きっといません」

それがどうしてその老人だけの福運であろうか。

金日成主席を高く戴いた全ての朝鮮人民が授けられた福運であったのである。

手ずから引いた500里の水路線

1948年9月のある日、金日成主席は着工を前にした平南(ピョンナム)灌漑工事の重要建設対象を一つ一つ視察した後、ヨルトゥ三千里が原の果てに位置しているある村を訪れた。

里人民委員会の一幹部から村の状況を聞き取っていた主席は、ふと思い出したように尋ねた。

「ここに来る途中に見ると、葦原が多いのですが、どうしてよい野原を遊ばせていますか」

「用水がなくてすでに作った水田にも水を満足に引けないので、そのまま遊ばせています」

「水がなくて遊ばせている土地はどれぐらいありますか」

「葦原だけでも60ヘクタール余りです」

主席は、直ちに葦茂る沼地に向かった。

長靴の首まで浸る沼地を見て回った主席は、よい土地なのに用水がなくて遊ばせていると胸を痛めた。

そして、いくら時間が忙しくても、今日はここで一泊しながら、この地方の農民の生活と農業の実態を具体的に調べてみたいと言った。

「この地方には飲料水がないので、ここに泊まることはできません」

一幹部がこう言うと、主席はこの地方の人びとが飲んでいる水

なら大丈夫だとし、静かにたしなめた。

当時、この地方の人びとは飲料水がなくて雨水を受けて飲んだり、水溜りの水を濾過して飲んでいた。

困った顔をしていた副官が主席に言った。

「将軍、この地方の人びとの飲む水は溜水で、それも消毒もしていないものです」

「それでもかまいません。水を沸かして飲めば大丈夫です」

ある農家に宿所を定めた主席は、夕方に村の農民たちと膝を交えた。

農民の労をねぎらった主席は、解放前には日本人と地主の虐待でろくに腰ものばせず生きてきたが、今は農民が国の主人になったのだから成しえないことはない、と豪快に笑った。

そして、里人民委員長に聞いた。

「今年の作柄はいかがですか」

「かんばしくありません」

「余寒が続いて春の種まきを適期にできなかった上に、干害まで加わって農作がおもわしくありませんでした」

やはり用水が問題であることを知り、胸を痛めたようにしばらく物思いにふけっていた主席は、このように言った。

――この地方の農民が天をあおいで農業を営むというのは理由なきことではありません。ヨルトゥ三千里が原の農民にとっていちばん大切なのは用水です。肝心なのは一にも二にも用水です。それでわれわれは、解放なった初年度に平南灌漑工事を決心しました。

夜遅くまで農業と用水の問題をもって話を交わした主席は、アセチレン灯の下で夜が明けるときまで灌漑建設の設計図面を検討した。

「将軍、夜が明けてきます。少しお休みになったらどうです」

随員の懇願に、主席は切々と言った。

——用水がなくて、指がすり減るほど棒で穴をあけて田植えをしているここの農民を思うと眠るにも眠れません。水に対するここの農民の世紀的宿願を解決してから休みます。私のことは心配せず、みなさんは早くお休みなさい。

そして、直接鉛筆を取って平南灌漑工事の建設図面に線を引きながら、500里にのぼる水路を記入した。

引き返してきた車

1949年1月のある日、平安南道順川(スンチョン)郡に対する現地指導の途上で舎人(サイン)面三花(サムファ)里(当時)にも立ち寄った金日成主席は、夜がかなり更けたときに平壌へ向かった。

暗がりに沈んだ車窓の外を眺めながら物思いにふけっていた主席はふと、私たちが三花里で最初に立ち寄った農家は解放前に暮らしが一番貧しかったようだが、昼間に外でちょっと立ち話をしたまま帰ってきたのが心残りでならない……と静かにつぶやくのであった。

この日、三花里を訪れて最初に立ち寄った農家のことが気に掛かっていた主席はこう語を継いだ。

——その農家の主人はおそらく、自分の家がみすぼらしくて国の首相も家の中に入らず、庭先でそのまま帰ったのだと寂しく思っているだろう。

私たちが再びその家へ戻り、主人と話し合いながら一晩泊まりましょう。

この言葉に副官は驚き、一言も言えなかった。

やがて乗用車は三花村へ後戻りした。

村が近づいてくると主席は、私たちが戻ってきたのを知らされると村の人びとはみな私たちを迎えようとして夜もろくに眠れないだろうから、静かに村に入るようにと言い、村はずれのヤチダ

モの木の下に車を止めさせてからこう言った。

——私たちが入るとその家で夕食を用意するに違いない。昼間に食べ残したものがあれば車の中で簡単に食事を済ませてから入りましょう。

小寒の寒い日に車の中で、それも夕食時間がかなり過ぎたときに簡単な食べ物しか出せなかった副官は、身の縮まる思いがしてならなかった。

ところが、主席は、われわれが山で戦っていたとき、温かいオンドル部屋で熱いご飯とスープを食べながら戦ったのか、気にしなくても良いと言って、むしろ彼を慰めるのであった。

主席が三花村のその農家を再び訪れたときは、零時20分頃であった。

静かに主人を呼び覚ました主席は、外でちょっと顔を合わせたことが老人に寂しい思いをさせたのではと思って再び戻ってきたと言った。

「将軍、この老いぼれにこんなにまで……恐縮の至りです。本当に……本当にありがとうございます」

主席は老人と親しく話を交わした。

「それで暮らし向きはいかがですか」

「将軍が与えてくださった土地で農作を営み、もう役牛も買いました」

——土地改革後に役牛も買ったとのことですが、本当にうれしいです。朝鮮の農民は先祖代々、役牛がなくて大変苦労してきました。

「役牛ばかりじゃありません。寝具や台所用品も土地改革後に買いました」

「寝具や台所用品も土地改革後に買ったとのことですか」

満足した主席は明るく微笑んだ。

——ご老人、私は老人を信じ、老人は私を助けて仕事により励みましょう。

「将軍、恐縮に耐えません。わしら百姓はひたすら将軍にのみしたがいます」

このように一夜を明かした主席が早朝5時頃に発とうとすると、老人は強く引き止めた。

「将軍、お粗末なものですが、朝食を用意しました。将軍に一食でももてなすことができたら、これ以上望みがありません」

主席は謝意を表してこう言った。

「まだ暮らしにゆとりがないのに、なぜ食事を用意したのですか。私たちは程なく平壌に行けるのです」

「ほんの気持ちだけですから、どうか私の願いをかなえてください」

老夫婦の切なる願いを容れて一緒に食事をした主席は、そろそろ帰らなければなりません、迷惑をかけてすみません、くれぐれも長生きしてください、と言った。

農民と共にした夕食

1949年10月のある日のことである。

この日、江界(カンゲ)へ行く途中、興洲(フンジュ)洞に入った金日成主席は、某人民学校の前で車を止めさせ、学校を見て回った。

学校のそばにある校長の家で村の農民たちと談笑し、子どもたちの簡単な演芸公演まで観覧したりして、いつの間にか山村の短い夕日は山の向こうに沈み、辺りは暗がり始めた。

主席はいそいそと席を立とうとする農民たちを引き止め、随員に夕食の膳を整えるようにと言った。

農民たちは自分たちの手落ちに気付いた。

（こんな無礼がどこにある。村に来られた将軍にご馳走をもてなせないまでも、むしろ将軍の整えた夕食の膳に向かい合うなんて）

主席が自ら杯に酒を注いで一人ひとりに勧めると、農民たちは一層身の置き所を知らなかった。

「わが村に来られた将軍に牛でもつぶしてもてなそうとはせず、こんなに将軍が整えてくれる食卓を前にしたのだから、こんなふつつかな者がどこにまたいるでしょうか。本当に申し訳ございません」

主席は彼にやさしく尋ねた。

「家に牛がありますか」

「将軍が与えてくださった土地で農作を営み、この前牛を一頭買いました」

ちょっと頭の中で計算してみた主席が言った。

——どうです。一頭の牛を買うには4年間稼がなければならないのに、私にもてなそうと牛を屠殺してしまうと、また4年が過ぎてから買えるのではありませんか。

そして、明るい笑顔で彼らの気持ちをなごませた。

「将軍！」

農民たちは言葉じりを濁し、喉を詰まらせた。

納得させた機械化の優位性

1949年11月のある日、黄海道(ファンヘ)載寧(チェリョン)郡のある里を訪れた金日成主席は、果てしなく広がった平野で軽快な発動機の音を響かせながら水田のすき起こしをしているトラクターの作業ぶりをしばらく眺めていた。

そして、近くで働いている一農民に歩み寄った。

「ご苦労さんです」

主席はトラクターがすき起こしている水田を指しながら尋ねた。

「水田を深く耕すのが良いですか、それとも浅く耕すのが良いですか」

「私の考えでは深く耕すのが良いと思います」

「深く耕して肥料を多く施せば、300坪ほどの土地からどれぐらい収穫できそうですか」

「6俵は十分に取り入れると思います」

こう言った彼は、秋耕を行えばどれぐらい多く収穫できるかという主席の問いにはすぐに答えられず、もじもじしていた。

彼は解放前に主に鉱山や工事場を歩き回っていたので、農作の経験には乏しかったのである。

周辺に集まっている村の人びとを見回しながら、営農経験の多い人はいないのかと聞いた主席は、一番年を取った農民に尋ねた。

「トラクターで秋耕を行ったらどうですか」

「将軍が送ってくださったトラクターのお陰で、財産や牛を持っている人に頭を下げなくても済むばかりか、かえってより胸を張って生きるようになってとても良いです」

「ところが、一部の農民たちはなぜトラクターで耕すのを喜ばないんですか」

この言葉に農民たちは顔を赤らめるばかりであった。

自分の土地に対する愛着のせいで、トラクターがあぜを崩して自他の区別もなく田畑を耕すのをよしとしなかったことが恥ずかしく思われたからである。

主席は広々とした田畑を眺めながら、トラクターで水田を耕すのは実に早くて良いと満足し、これから農民はすき起こしだけでなく、全ての農作業を機械で行うようになるだろうと確信に満ちて言った。

――そうなれば、農作業が楽になり、農民の暮らしが豊かになり、わが国の農村は近代化するでしょう。

地軸を揺るがしながら水田を耕すトラクターの発動機の音は、やがてもたらされる農村機械化の誕生を告げる産声のように青い空の果てへ響いていった。

国の初のトラクター運転手

1949年11月のある日、金日成主席はトラクターの耕耘作業を見るべく沙里院（サリウォン）の農事試験場を訪れた。

主席は責任運転手に尋ねた。

「トラクターの運転技術はいつ習ったのかね」

「1947年に平壌に行って学びました」

その答えを聞いた主席は同行した幹部に、彼はわが国の初のトラクター運転手です、とほめた。

そして、家族は何人なのか、トラクターですき起こしをするのは骨が折れるだろう、トラクターが故障なしに正常に稼動するのかと聞いた。

親のような情愛のこもった問いに彼は、初めてトラクターを運転するときは苦労したが、今は技術も少し伸び慣れているので骨が折れず、故障もなく稼動していると答えた。

彼の答えを聞いて満足した主席は、情愛のこもったまなざしで彼を見つめながら言った。

――これから一生懸命勉強して技術をもっと高め、新しい運転手も多く育成して、農作業の機械化で先駆者にならなければなりません。

そして、わが国の農民は長い間封建的搾取と日本帝国主義者の過酷な弾圧の下で血と汗を流し、立ち後れた農具に頼って農業を

営んできたため、機械で農業を営むのを神秘視し、まだよく受け入れようとしないと指摘した。

また、今は土地に対する農民の宿願がかなえられた、国の工業を発展させて様々な農業機械をたくさん作って農民を骨の折れる労働から解放しなければならない、沙里院農事試験場でも様々な農業機械を考案し、在来式農具も改良して、骨の折れる農作業が楽にできる試験を多く行うことが大切だと強調した。

主席の言葉に彼は、今後繰り広げられる農村の機械化で自分が受け持っている任務の重要性を改めて意識した。

同年輩と交わした話

1950年7月のある日の明け方。

前線司令部の現地指導を終えて平壌への帰途に付いた金日成主席は、暗がりの中から鳴る牛の鈴の音を聞き、車を止めさせた。

農民たちが小麦の現物税を前線に運んでいくということを聞いた主席は、照明弾によって明るくなった上空を指し、ヤンキーどもがあんなにあがいても、朝鮮の農民はこんな夜中にも、戦っている人民軍軍人を支援している、わが農民は本当に見上げたものだ、あの農民たちと少し話し合ってから行くことにしよう、と言い、車を降りて山の麓にある大きな栗の木の下へ足を運んだ。

分け隔てなく農民たちと岩の上に座り、タバコを勧めていた主席は、ふと彼らの年を聞いた。

「みな38歳の同じ年です」

一農民の答えに主席は、誕生日はいつなのかと聞き直した。

「こっちは11月生まれで、私は12月生まれです」

主席は、それならわれわれはみな同年輩だが、誕生日が遅れているから自身より年下だと言って豪快に笑った。

そして、同年輩同士で心置きなく話し合ってみよう、ここは水田もなく、平地も少ない所だから農民の食糧事情は困難だろうが、軍人たちに送る食糧から準備したのだからさらに困難になったのではないかと尋ねた。

「もうすぐトウモロコシの初物も出ますから、大丈夫です」

彼らの答えを聞いた主席は、しばらく物思いに沈んでいた。

このとき一農民が、かつてこの地は粟やジャガイモしか出来なくて人の住めない所だったが、金日成将軍が土地を分け与え、肥料も送り、それに多くの農家で牛も買えるようにしてくださったお陰で豊かに暮らすようになった、なのに国のためにこれほども役立てなくてはと言うと、他の農民もこう付け加えた。

「ヤンキーどもに勝ちさえすれば、豊かな暮らしをすることができます」

主席は、銃後が強固であってこそ戦争で勝利することができるのだとし、こう言葉を継いだ。

——戦争の勝利後にはなすべきことが多いだろうが、われわれは農民に豊かな暮らしをさせることに大きな力を入れようとします。

国家が資金を出して瓦葺の家を建ててやり、電気も引き、灌漑工事も行って全ての田畑に灌水をする計画です。

主席は、人びとが決心して取り組みさえすれば、住みよい所につくり変えることができるとし、この地の主人である農民のなすべきことについて一つ一つ教えた。

農民たちは主席に心から感謝した。

「よい話を聞かせてくださって本当にありがとうございます」

前線からの帰り道で平凡な農民に会って抱かせた信念、勝利した故郷の明るい明日を設計してくださった主席の慈愛に満ちた姿は、彼らの心の中に永遠に刻み付けられた。

林城谷での脱穀

1950年11月のある日のことである。

この日の午前、金日成主席はモロコシの脱穀をしている林城谷（リムソン）のある農家を訪れた。

「ご苦労さんです」

主席はあたかも隣家に来たようにやさしく話しかけ、モロコシの穂が散らかっている庭に入ってきた。

「おや……」

あわてて駆けてくる農民に主席は、「さあ、脱穀を続けなさい」と言って庭を見回した。

「今日のような寒い日には大豆の脱穀がよいでしょうが、どうしてモロコシの脱穀をしていますか」

「現物税を穀物の品種別に納めるためなんです」

主席は農民夫婦に一緒に脱穀をしようと言い、自ら殻竿を手にして脱穀を始めた。

ひゅっと音を立てながら殻竿がモロコシの穂を調子よく打つたびに、よく熟れたモロコシの粒が相次いで殻からはじき出された。

庭の雰囲気はますます盛り上がった。

主席の殻竿打ちに感嘆している副官に向かって主席が尋ねた。

「君、殻竿で脱穀してみたことがあるかね」

「中国の東北地方にいたとき、多くやってみました」

幼いときから農作業で鍛えられていた副官はこう答えてから、主席から殻竿を受け取って脱穀を始めた。

脱穀する彼を眺めていた主席は、なかなか上手だとほめた。

その賞賛に気をよくした副官が力一杯殻竿を持ち上げたが、打ち損なって自分の耳を打ってしまい、それを見た周辺の人たちはどっと笑い出した。

主席は笑いながら農民夫婦に少し休もうと言い、縁側に腰を下ろした。

主席は家の前の畑にまだ実を取っていないトウモロコシの茎が積まれているのを見て、こう言った。

「あれはトウモロコシではありませんか。実がそのまま付いていますね」

そして主人に、今、農民たちは主に何の仕事をしているのか、まだ実を取っていないトウモロコシが多いのか等々、営農実態についていちいち聞いた後、副官にこう言った。

「君たちがあんな仕事をしてくれたまえ。高山鎮（コサンジン）の部隊に連絡して農民たちの仕事を手伝うようにしなさい」

こうして、戦争の運命を左右する決戦に立っている軍人たちが、山間部農民の取り入れを手伝う光景が繰り広げられた。

野良仕事をする主席の一家

1951年2月のある日。

金日成主席は乾芝(コンジ)里に位置する最高司令部の執務室に責任副官を呼び、万景台の叔父と外伯父をはじめ後方にいる親戚のうちで働ける男性はみな、万景台に戻って農作を営むようにすべきだと言った。

責任副官は驚いた。

（万景台の一家に野良仕事をさせるなんて……）

祖国が解放され、主席が国家元首に選出されたときにも、祖父の金輔鉉(キムボヒョン)と叔父の金亨禄(キムヒョンロク)など万景台の一家は、農は天下の大本だとし、手から手鍬を離さず野良仕事を続けていた。

一家の人たちのこのような品性をよく知っている主席は、こう語を継いだ。

――現在、わが人民が一時的な戦略的後退の試練を克服し、戦争の勝利を目指して困難な闘争を続けていることを彼らもよく知っているから、平壌に戻ってどんな仕事でもするつもりでいるだろう。そして、万景台に戻って農作を営むようにと言われると喜ぶに違いない。後方にいる親戚に農作を営ませるのは、彼らの気持ちからしても、健康の面からしても、先祖代々勤勉な家門である万景台の一家と七谷(チルゴル)の一家の家風を保つ意味からしてもよいことである。……

　こうして、主席の一家は万景台と平壌の近くで平凡な農民として暮らしながら、戦時の穀物生産のための闘争の先頭に立つようになった。

名誉農場員

元和里(ウォンファ)には金日成主席が戦火の日々に出向いて自ら種まきをした水田がある。

1952年5月のある日、元和里を訪れた主席がこの水田に足を運んだとき、農民たちは陸稲の種まきをしていた。

「ご苦労さんです。みなこちらに来てください」と言って、農民たちを身近に呼び寄せた主席は、彼らの節くれ立った手を一人ひとり取った。

そして、牛の背に偽装を施してすき起こしをしている女性農民たちに視線を向け、こう言った。

「女性が犂取りをするのは、大変立派なことです」

主席は彼女たちと話し合う過程で、彼女たちが役牛共同利用班と労力互助班を組んで農作を営んでいることを知った。

彼女たちは主席に、5、6戸の農家が一頭の牛を共同で買って役牛共同利用班を組み、労力の互助も行っていると答えた。

「元和里で役牛共同利用班と労力互助班を組み、互いに助け合いながら農作を営んでいるのは立派なことです。労力の互助と役牛の共同利用を行って互いに力を合わせ、農業を営むのは朝鮮の農民の伝統的な美風です」

満足した口調で農民たちを積極的に支持した主席は、種のかごを手にして自ら二つのうねに種を播き始めた。

そして、そばの老人に、「ご老人が播いたうねと私が播いたうねに杭を打ち込んで目印を付けておき、秋になってどのうねの稲がよく出来たか比べて見るのがいかがですか」と言って豪快に笑った。

この日、主席の播いた種は、やがて全国に播いていく農業協同化の初の種であった。

それから3年後、再び元和里を訪れた主席は、戦争のときより丈夫な男たちが増えたのを見て、とても満足した。

除隊軍人も増え、それに民青員も増えていて働き甲斐を感じているだろうと自分のことのように喜び、こう語を継いだ。

——私もここの組合員です。助けとなれるかは知れませんが、共に農業をよく営んで元和協同組合を発展させてみましょう。

このときから主席は年に数十回、毎年のように元和里を訪れ、元和協同組合が協同化を立派に完成できるよう手取り足取りして導いた。

主席は生涯を終えるときまで「名誉農場員」として農場のために全てを尽くした。

乗用車で送った農村女性

1953年5月のある夜。

主席の車がある橋を渡り終わったとき、主席は車を止めさせ、ドアを開けて道に降り立った。

そして副官に、荷物を背負っていく女性を指しながら、彼女を車に乗せるようにと言った。

自分を車に乗せた方が主席だとは気付かず、ただ恐縮している女性に、主席は、気楽にお座りください、家族は何人ですか、親戚はいませんか、と尋ねた。

3人家族だが、息子は人民軍に服務し、今はしゅうとめとの二人暮らしで、もともと夫が3代続きの一人息子だったので近い親戚もいないという答えを聞いた主席は、しばらく無言のまま彼女を見つめた。

老いたしゅうとめに仕え、年取った独りの身で農作業に努める彼女の姿から、この国の女性の姿を思い描くかのように、彼女のしわの寄った顔や荒れた両手をじっと見つめていた主席は、苦労が多かったでしょう、独りで農作を営むのは大変でしょう、軍隊に服務している息子を家に連れ戻したらどうですかね、とやさしく聞いた。

彼女は驚いて、国があってこそ安心して農業も営めるものなのに、ヤンキーどもと戦う途中に息子を帰郷させるなんてもっての

ほかです、独りでも野良仕事ができます、とあわてて答えた。

自分の苦労よりも国のことを先に考える彼女の真情に感心した主席は、こう語った。

——息子は必ず勝利して帰って来るでしょう。息子が帰るまでしゅうとめによく仕え、農作もしっかり営むべきです。

主席が農村の女性と話し合う間に車はいつの間にか分かれ道に至った。

主席は自らドアを開け、彼女が車から降りるのを手伝った。

（あのありがたい方はいったい誰かしら？

真夜中に急いでいる多忙な方に違いないのに、この田舎の女を車に乗せ、家の暮らし向きや営農状況までいちいち尋ねてはよい話をしてくれるのをみると普通の幹部じゃないようだが……）

彼女は遠ざかっていく車を長いこと見つめた。

「それでも少しは分けて与えたでしょう」

1957年3月末、咸鏡南道(ハムギョン)内の営農実態を確かめていた金日成主席は、洪原郡(ホンウォン)烽火(ポンファ)協同組合(当時)で昨年に豊作を収めたという報告を受け、あまりにもうれしくてその足で協同組合を訪ねた。

村で最年長の二人の老人と膝を交えて話し合っていた主席は、一老人に聞いた。

「ご老人、組合にはいつ入りましたか」

「1954年です」

「誰かに勧められて入りましたか」

「いや、自分で入りました」

この返答に大いに満足した主席は、初年度の分配量はどれぐらいであり、その中で籾米とジャガイモはどれぐらいなのか、そして、その翌年の分配状況はどうなのかを具体的に尋ねた。

老人は、初年度には籾米とジャガイモをそれぞれ20俵ずつ、翌年には41俵の籾米と40俵のジャガイモを分配されたと誇らしげに言った。

すると主席は、働く人は何人であり、暮らし向きはどうなのかと再び尋ねた。

働く人は二人で、暮らしがよくなったという彼の答えを聞いた主席は、大変喜んだ。

そして、彼のそばにいる老人に聞いた。

「ご老人の暮らしはいかがですか」

彼も先の老人に負けまいと、初年度に10俵の籾米と10俵のジャガイモを、その翌年には20俵の籾米と20俵のジャガイモを分配されたと声をはずませて言った。

このように、二人の老人からその組合員の生活状況を具体的に確かめた主席はたいそう満足した。

「それじゃ、二人とも2倍の分配を受けたわけですね」

主席のこの言葉に、周囲の組合員たちも幸せと喜びに満ちて朗らかに笑った。

彼らの笑い声を聞いて積もりに積もった疲労が癒されたかのように、明るい微笑を浮かべていた主席はふと、真顔になって一老人に再び尋ねた。

「息子の家に少し分けて与えますか」

「首相、若い者は自分の手で暮らしを立てるべきなのに、年寄りが稼いだものを分けて与えるなんて話になりません」

彼らの偽りのない言葉に主席は豪快に笑った。

そして、座中を見回しながら老人たちに言った。

「それでも少しは分けて与えたでしょう」

主席の言葉に周囲の人びとはまた一斉に笑いさざめいた。

主席の恩恵によって日増しによくなる暮らしを思い返しながら思う存分笑いさざめく組合員の幸せの笑い声であった。

打ち破られた古い観念

1957年6月のある日、金日成主席は白雲(ペクウン)農業協同組合（当時）を訪ねた。

当時、その組合では春から例年にないひどい日照りが続いて営農に少なからず支障をきたしていた。とりわけ棚田の多い組合では日照りのため、掘り池や水溜りまで底を尽き、用水不足で6月に入っても田植えをまともにできずにいた。

干害を受けている棚田を眺めながら胸を痛めていた主席は、慎重な口調で語った。

――干害防止対策を引き続き立てなければならない。こんなときには空ばかり見上げず、土地の中を見通すべきだ。小川をせき止め、井戸や掘り池も作って干害を防がなくてはならない。

その年、農場では各所に井戸や掘り池を作り、棚田に水を引いてひどい干ばつに耐えたばかりか、例年にない豊作をもたらした。

1963年8月のある日、農場を再び訪れた主席は濃い緑に覆われた山々と稲穂がそよぐ棚田を眺めながら、「みなさん、ご苦労さんでした。棚田の稲がよく出来ましたね」と言って大変喜んだ。

そして、空ばかり見上げてはならないと言って豪快に笑った。

あぜの上に座って

1958年4月のある日のことである。

金日成主席は現地指導の道で故障したトラクターを目にした。

主席はそのトラクターに近寄って、キャタピラを押してみもし、運転室のドアを開けてみてから、トラクターの下に向かって声をかけた。

「ご苦労さんです。なにか大きな故障ですかね」

「ええ、ボルトが一つ抜けているんです」

「小さな故障だな」

運転手はトラクターの下に横たわったまま、手を休めて外に顔を向けた。

一瞬彼はあまりにも大きな衝撃でただ当惑するばかりだった。

主席は微笑をたたえて、あわてずに、修理を終えるようにと言った。

彼がトラクターの下から出ようとすると、主席は、体が車体にぶつからないように注意しなさい、と言い、彼の腕を取って立ち上がらせた。

仕事が難しくないかと聞いた主席は、些細なことでもおろそかにすれば、それが大きな故障の原因になるのだ、ボルト一本で車が動けなくなったのではないか、とやさしく言った。

そして、これからは日頃から整備を丹念に行うべきだと言ってか

ら、すき起こしたうね間をまたいで田畑の真ん中へ足を運んだ。

主席は見栄えよくすき起こした田畑を見回しながら「見事な出来栄えだ。本当に機械化は素晴らしい」と言った。

そして、農民たちが機械で楽に田畑を耕すようになったことに満足し、田畑の土を手に握って喜んだ。

再びトラクターのある所に戻ってきた主席は、田畑のくろで乾いた草をむしり取ってあぜの上に敷き、「さあ、ここに座ってちょっと話しましょう」と言い、トラクター運転手の腕を取ってそばに座らせた。

主席は、故郷はどこなのか、両親はみなお元気なのか、トラクターはいつから運転したのかと尋ねた。

故郷は陽徳であり、幼くして母を亡くし、父と一緒に暮らしながらトラクター運転手養成所を出て運転手になったが、運転を始めてわずか数カ月しかならないという彼の話を聞いた主席は、運転経験が浅いにもかかわらず、田畑のすき起こしを上手にやったとたたえた。

主席は運転手の作業服の襟も正してやり、外れているボタンもかけてやりながら「下着は厚いものを着ているのかね」と尋ねた。

そして、風邪を引かないよう気を使い、いつも衣服をきれいに洗って着、風呂にもたびたび入って健康な体で働くために努めるのだと言った。

また、機械を定期的に点検し補修すれば故障が生じないし、機械も人間と同じだと教えた。

主席はゆっくりと立ち上がり、「そろそろ行かなくては。それじゃ頑張ってくれよ」と言い、運転手の手をやさしく取った。

長い間骨の折れる仕事で腰の曲がった農民を苦しい労働から解放させようとする主席の高い志に感動した運転手は、トラクターのハンドルをしっかり握って田野を走った。

彼らこそが博士なのです

1959年2月初めのある夕方。

金策(キムチェク)郡（当時）のある農業協同組合でウサギ飼育工として働く平凡な農村青年が、一幹部に案内されて党中央委員会の庁舎の階段を上がっていた。

金日成主席は深々と頭を下げる青年の手をやさしく取り、そばの幹部たちに紹介した。

青年の手を取って傍らの席に座らせ、健康や生活状況をいちいち聞いた主席は、君の話を聞くために党中央委員会常務委員会委員たちが集まっているから、ウサギ飼育過程で得た経験を話してみるようにと言った。

内心驚いた青年は腰を上げたものの、すぐ口を利くことができなかった。

主席は微笑をたたえ、遠慮しないでその間のことを話してみなさいと重ねて勧めた。

青年は話を始めた。

良種の10匹の種ウサギを選別し、交尾や子ウサギの管理を科学的に行ってウサギを426匹に増やしたこと、山の薬草を採ってウサギの疾病を予防したこと、ウサギを放し飼いにして少ない人手で多くのウサギを飼育したことを具体的に話した。

主席は、彼の話にうなずいたり、賞賛したり、たまには手帳に

メモしながら、彼の素朴な話を注意深く聞いた。

特に、青年がウサギの繁殖率を高めるために自らテストしたデータと、飼料を解決するために丘陵に牧草地を造成したことなどを話したときは、ウサギの数を増やすためにいかほど努力したのかがよく分かると言って、彼の労苦をねぎらった。

青年は主席に向かって言った。

「ウサギを飼育するのはそれほど難しいことではないと思います。ウサギを大々的に飼育するという金日成首相の教えを肝に銘じ、決心して取り組めば繁殖率をいくらでも高め、草を肉に変えることができると確信しました」

すると、主席は幹部たちにこう言った。

——博士は他ならぬ農村にいます。彼らこそが博士なのです。彼の話を新聞や雑誌、書物に大いに掲載するのがよいでしょう。

その後、青年は全国を巡りながらウサギ飼育の経験を発表した。

主席は、平凡な農村青年の素朴な話を通じて、ウサギ飼育を大衆挙げての運動として繰り広げるのが正当であることを再確認し、その小さな火種を全国に炎として燃え上がらせる構想を練った。

干拓地に印した初の足跡

1960年6月のある日、金日成主席は海面干拓状況を確かめるべくある干拓地を訪れた。

広々とした干拓地をしばらく眺めていた主席は、随員たちに実地に入ってみようとして道なき干拓地原の方に歩を進めた。

随員たちは当惑した。

そこから干拓地原へ行く道はこれといったものがなく、10余ヘクタールの開墾された水田を除いては全部ぬかるみであった。

「もう少し前の方へ出てみましょう」

主席はぬかるみをいとわず、開墾された水田の方へ歩みを移した。

「首相、もうこれ以上先に進んではいけません。道がありません」

随員たちが主席を引き止めた。

「大丈夫です。人民のためのことなのに、ためらうことがありましょうか。道がなければわれわれがこの干拓地に最初の道を開きましょう」

主席はぬかるみに大きく一歩を踏み出した。

足を取るぬかるみもさえぎる葦もいとわず、主席は喜んで海の方へ数百メートルも進み出た。

果てしなく広がった干拓地原をしばらく見渡していた主席は、

幹部たちに言った。

「実に素晴らしい平野です。将来性があります。ここに国営農場を設けるべきです。田植えが困難であるなら、直播きをして稲作を営む国営農場をつくるべきです」

主席は、広い海をせき止めて干潟地を開墾し、海岸の丘陵には文化住宅を見栄えよく建てるべきだとし、「農民の人手だけで海面干拓を行うのではなく、それを専門とする企業を一つ設けて労働者が行うようにすべきです」と言った。

こうして、主席が初の足跡を印して道を開いた干拓地に一つの農場が生まれるようになった。

組合員たちの分配量

1960年9月のある日、金日成主席は豊年満作の青山里(チョンサンリ)を訪れた。

「みなさん，ご苦労さんです」

組合員一人ひとりと握手を交わし、黄金の稲穂が秋風に波打つ田野を満足げに眺めていた主席は、「耕地整理も十分になされ、稲の作柄も上出来です」と言った。

主席から今年の営農状況について聞かれた農場の幹部が、穀物生産計画を超過遂行したことや決算分配の予想数字を報告した。

「結構です。富裕な中農になりました」

主席は微笑を浮かべ、満足の意を表した。

続いて主席は、1年分の食糧をどれほど取っておいたら農民が満足するだろうかと尋ねた。

「一人当たり250〜300キログラムなら十分だと思います」

「それぐらいでは足りないのではありませんか」

しばらく考えにふけっていた主席はこう言った。

「一人当たり約400キログラムずつあれば十分でしょう。子どもたちはご飯をたくさん食べようとします。また、朝鮮人は市場に出かけてあいやけに会うと、米を売った金で昼食をおごる習慣があります。それればかりではありません。家にお客が訪ねて来るとか、工場に勤める息子が来ることもあり、軍隊から除隊した子息が帰って来ることもあります。また、勉強のため

家を離れていた子息や嫁いだ娘が里帰りすることもあります」

主席は、組合員たちを見回しながら続けた。

——彼らが家に来たとき、食糧が十分なのを見るべきであって、米が不足して困っているのを見て帰っては、安心して仕事や勉学に励むことができません。……

こうして、組合員たちは除隊する息子や里帰りする娘、それにあいやけをもてなす分まで合わせた分配を受けるようになった。

「文徳郡に来るたびに雪が降りますね」

雪が降り積もっていた1961年12月のある日。

朝から降り始めたぼたん雪は午後になっても止むことなく降り続けた。

この日、金日成主席は積雪を踏み分けて文徳郡(ムンドク)立石(リッソク)農業協同組合(当時)の一作業班を訪れた。

民主宣伝室の庭に立ち入った主席は、「民主宣伝室を立派に整備しました」とたたえ、宣伝室に入ってみんなに席を勧めた。

農場員たちは一つの家族のように主席をはさんで円陣を作った。

オンドルに手を当てて暖房のほどを確かめた主席は、「上のオンドルも暖房がききますか。上が寒いならみんなこっちへ下りて来なさい」と言いながら、座布団を脇に押しやり、オンドルにそのまま座った。

主席は、畑にはどんな穀物を植えたのか、ヘクタール当たり収量はどれぐらいなのか、一戸当たりの分配量はどれほどなのかなど、農作業と農場の管理について農場員に具体的に聞いた。

農場員たちの話を聞きながら、ぼたん雪の降りしきる窓外に目をやっていた主席は、こう言った。

「ここ文徳郡に来るたびに雪が降りますね。この前、上八里(サンパル)に来たときも雪が降ったのです。その年も豊作だったのだから、明年にもまた豊作を収めることに違いありません」

ついで主席は、この農場に来て稼動しているトラクターの台数やその利用状況を確かめ、トラクターの運営の状況や作業方法、運転手たちの組織生活に至るまでつぶさに教えた。

また、文化住宅は何棟建てたのか、みな瓦葺家に住んでいるのかなどを聞いた後、農民が代々受け継いできた藁葺家の代わりに文化住宅に住むようになったと大変喜んだ。

この日、主席は数時間をかけて農場の管理・運営における懸案の解決方途を一つ一つ示してから農場を後にした。

もう夜はかなり更けたが、雪が降り積もって辺りは明るかった。

農場員たちは主席の乗った車が遠くへ消えるまで手を振って見送りながら、長いこと立ちつくしていた。

農村革命家の典型

金日成主席が一年に数回も会って営農について語り合い、模範農民、組合の管理委員長、労働英雄、最高人民会議代議員として押し立てた玉桃里(オクト)の林根相(リムグンサン)は、戦争時期に小麦の広条播種機を考案して戦時食糧増産に寄与し、戦後には党の農業協同化方針を支持して真っ先に組合を組織した人である。

彼は玉桃里に岐陽(ギヤン)灌漑の用水を引くための20キロの用水路工事でも額に汗して働いて6カ月ぶりに工事を完成させ、畑の随所に散在していた農家を全部取り払って山の麓に新設し、長きにわたって残っていた石ころ畑を開墾して100余ヘクタールの水田をつくった。

そして、山に囲まれている玉桃里では畜産を発展させるべきだとした主席の教えにしたがって、共同畜舎を建てて数百頭の豚を飼育し、羊も移動式に放牧するなど懸命に努力した。

彼はいつもズボンの裾をたくし上げ、腰にシャベルか手鍬を差して歩いた篤農であった。

1965年9月、主席は現地指導の道すがら、玉桃里のトウモロコシ畑のそばに車を止めさせた。道端にいた林根相のあいさつを受けた主席は、お元気ですか、病気になったと聞いたが容体はいかがですか、とやさしく聞いた。

主席は随員たちに、われわれは党に忠実なこのような人たちを大

事にしなければならないと強調し、彼に病気の治療においても積極分子になるべきだと励ました。

1967年12月のある日、再び玉桃里を訪れた主席は、丁重にあいさつする林根相の手を取って「根相さん、体の具合はどうですか」と心配そうに尋ねた。

「大丈夫です」

林根相は喉を詰まらせた。

「どうして頻繁に病気になるのですか」

主席は肉親の情を込めて聞き返した。

「もう大丈夫です」

心配をさせまいと気を使う彼に、主席はふと年は幾つなのかと聞いた。

55歳だという彼の返答に、主席はそれならまだまだですと慰め、随員たちに彼は戦争のときに多くの苦労をしたと言った。

1968年12月、玉桃里を訪れた主席は「管理委員長、お変わりありませんか」と言い、しばらく彼の手を取って放さなかった。

主席は、今年も豊作だとのことですが、穀物の収穫状況はどうですか、と尋ね、彼の答えに「最高の水準ですね」と満足を示した。

主席の教示貫徹とあれば一身をささげる実直で忠実な農村活動家である林根相は、昼夜を分かたず仕事に奮闘していた途中に倒れて病院に運ばれた。

主席は、有能な医師と高価な薬を贈りながら、彼を必ず回復させるようにと強調した。

彼が世を去ったという悲報に接した主席は、本当に惜しい人を失ったと声を曇らせた。

ある年、玉桃里を通り過ぎていた主席は車を止めさせ、そこの山河を見回した。

そして、ここの山河を眺めるたびに林根相が思い出されて涙が出る、解放前に3代にわたる作男の家庭で生まれた彼は、解放後にわが党の農業政策を貫徹するために自分の全てをささげた、と回顧した。

主席は、農業問題について彼とよく語り合ったが、彼は玉桃里を「桃源郷」につくるという私の言葉を座右の銘とし、一生を休みなく働いた党の真の息子であり、農村革命家の典型であると述べた。

主席は、まさに林根相のような数多くの農民英雄と深い縁を結んで農村基盤を打ち固め、社会主義農村建設の遠大な構想を立派に実現していった。

「私が力添えするから、きっと長者になるのです」

1971年10月のある日、金日成主席は香山郡(ヒャンサン)天水里(チョンス)を訪れた。

この地方は、耕地のほとんどが斜面畑やちっぽけな水田なので、昔から一枚のわらむしろをもって三つの水田を覆うことができると言われてきた。

主席は道端に車を止めさせ、野菜畑に入って大根を一つ引き抜いて重さを推し量ってみた。

そして、畑で働いている一農場員を呼び寄せて土まみれの手を取って労をねぎらい、この大根はトウモロコシの裏作なのか、大根がこの程度ならよく出来たと言えるのか、と聞いた。

農場員は、この地方はやせ地ですが、これくらいならよく出来ましたと答えた。

主席は再度、昨年のヘクタール当たりの収穫量と一戸当たりの分配量を聞いた。

穀物の収穫量も分配量も多くなかった。

「生活に不自由しているんじゃありませんか」

農場員は、今は解放前の山間部の地主に劣らぬ満足な暮らしをしていると答えた。

農場員のはきはきした返答を聞いた主席は、何か心配そうな顔で村の方へ歩を移した。

しばらくして主席を取り囲んで農場員たちが一堂に会した。

「どうすれば農民が長者になれそうですか」

主席の質問に答えられずもじもじしている彼らに笑みをたたえて、農作業を全部機械化すればどうですか、と聞き直した。

そして、われわれの労働者階級が新しい「前進」号トラクターと「更生」号小型トラックを生産している、「前進」号トラクターは小さい田畑にもゆうに出入りでき、耕耘もできるから役牛より便利である、「更生」号小型トラックも小道をいくらでも行き来することができる、と述べた。

一作業班長が立ち上がって、「前進」号トラクターと「更生」号小型トラックが1台ずつあれば、作業班の牛車12台を全然使わず、農作業を全部機械化できると答えた。

「それなら、まず『更生』トラックを彼の作業班に与えることにしましょう」

主席は、今後農作業を機械化して役牛が要らなくなれば、食肉をより多く生産することができる、機械化をすればそれだけ利益になる、と言った。そして、現有の牛の頭数や雌雄の比率、牛肉の値段を確かめた主席は、牛を今のように飼うのではなく、人工受精法を取り入れて交雑牛をつくれば食肉生産を増やすことができる、牛と共に羊も多く飼育し、トウガラシも多く植えて現金収入を増やすべきだ、丘陵には果樹園を造成し、養蜂まですれば長者になれる、と言った。

そして農場員たちを見回しながら、隘路があれば解決してやるから遠慮なく話すようにと言った。

「みなさん、私が力添えしますから、きっと長者になるのです」

農場員たちは、主席の教え通りに天水里を他人にひけをとらない裕福な農場につくる決意を固めた。

農場員と分かち合った喜び

1973年10月末、金日成主席は大同郡硯谷（ヨンゴク）協同農場（当時）を訪れた。

農場では豊作をもたらした喜びを抱いて稲束運搬と脱穀に全力を傾けていた。

主席は歓呼する農場員たちに手を振って答礼し、ある分組の脱穀場に足を運んで穀物の生産量を確かめた。

分組長から穀物の生産状況を聞き、その成果を重ねてたたえた主席は、施肥量はどれほどなのか、倒伏した稲はどれぐらいなのか、どんな田んぼの稲が倒伏したのか等々、稲の生育における肥料の影響を具体的に聞き取った。

稲の倒伏した田んぼが少々あったとの返答に、主席は再度その原因を聞いた。

返答に窮している彼に、主席は「……窒素肥料を施し過ぎて稲が倒れたのです」とその原因を指摘した。

いつの間にか豊饒な農村の一日が暮れて夜になった。

しばらく農民たちの脱穀作業を見ていた主席は、少々休んだらどうですか、彼らをみな呼んで来なさい、と言った。

農場員たちが駆け付けて来て、主席に丁重にあいさつをした。

主席は、慈愛深いまなざしで彼らを見回し、「米を買い付けるとき、どんな商品を求めていますか。何でも良いから言って

みなさい」と言った。

　農場員たちは口々に大釜、雨がっぱ、長靴、ミシン、洋服だんす等々、と気兼ねなく言った。

　副官にそれを全部メモさせた主席は、ある女性農場員に必要な商品は何かと聞いた。

　しばらくためらっていた彼女は、ナイロン衣服とテトロン洋服が必要だと答え、はにかんでうなだれた。

「今年は豊作ですから、服を一着こしらえて着るのも良かろう」

　主席は、肉親の心情で肯定してくれた。

　そして、自分の腕時計を指して「腕時計は要りませんか。郡の商店で壁紙やオンドルの床紙といったものを売ってくれますか。農村文化住宅をきれいに整備する条件は整っていますか……」と、生活の隅々まで気を配った。

　そのとき、一農場員が来年にも大豊作をもたらして主席の恩恵に報いると決意を述べた。

　それは彼一人ではない全ての農場員の誓いであった。

乗用車で引いたトラクター

1973年11月初めのある日。

价川(ケチョン)郡のある農場の大道に、稲束を満載した1台の「前進」号トラクターが出ようとしていた。

このとき、運転手は安州の方から山の曲がり角を回って走って来る数台の乗用車を見付けた。

（何の車だろう？）

彼女はトラクターを道路のわきに止め、乗用車の通過を待っていた。

ところが、意外にも乗用車が止まり、ドアが開いて金日成主席が降りるのではないか。

「元帥さま！」

彼女はトラクターから降りて一目散に主席のところへ駆け寄った。

年少の女性運転手の労をねぎらって油だらけの手を温かく取った主席は、トラクターの前で歩みを止めて、エンジンやハンドル、変速装置などを注意深く見て、「前進」号トラクターに稲束をどれほど積むのかと聞いた。

700キログラムだという返答に、主席はそれなら適当なのか、1トンの積載は不可能なのかと確かめ、一日に稲束を何回運搬するのかと聞いた。

彼女は父に甘える娘のように15回だと答えた。

ちょっと暗算してみた主席は「1日に15回なら10トン500キログラムになりますね」とすこぶる満足した。

主席は彼女に腕が痺れるではないかと尋ねた。

「そんなことはありません。大丈夫です」

それでも主席は心が休まらず、彼女に腕を見ようと言った。

彼女は油のにじんだ手を見せるのが恥ずかしくて後ろに隠した。

主席は微笑をたたえ、「かまわないから腕をちょっと見せてくれ」と言い、彼女の手のひらや手の甲を触ってみ、袖をたくし上げては手首の太さも確かめた。

そして、何のご飯を食べたのか、おかずは何にしたのかと聞いてから、無理をしないで十分に休息を取り、食事も適時にすべきだと言った。

そして随員たちに、冬には寒いから厚手の防寒服を作ってやり、帽子と靴、手袋も良質のものを供給するようにと指示した。

安州の方を指した主席は、彼女にトラクターをあの方へ運転するようにと言い、随員たちに乗用車が道路のわきに避けるように指図した。

たちまち乗用車は道路のわきに避け、大道の真ん中には「前進」号トラクターだけが残った。

主席は彼女の肩を叩きながら早くトラクターを運転するようにと言った。

ハンドルを取った瞬間、彼女ははっとした。

（あ、これをどうすれば良いのかしら！）

エンジンをかけるにはセルモーターが必要なのに、あいにくそ

れが故障したので、朝に修理分組に預け、急いで稲束の運搬に出たのである。

彼女は主席に勢いよく走るトラクターを見せられず、かえって心配をかけるようになったと思うと、胸が締め付けられるような気がした。

彼女は主席にセルモーターを置き忘れたことをおそるおそる言った。

「大変なことになったね」

主席は、随員に乗用車でトラクターを引いて始動させるようにと言った。

（ええっ、乗用車でトラクターを引くなんて!?）

しばらくして乗用車に引かれて「前進」号トラクターが始動した。

運転手は巧みにトラクターを運転した。

大きな音を響かせて走るトラクターを眺めていた主席は静かに言った。

「若い娘が一日に15回も稲束を運んだそうですが、素晴らしい娘じゃありませんか。大変立派です」

若い娘までトラクターの運転ができて、これ以上農民が荷かつぎ仕事をしなくて農作を営むことができるようになったことに主席は大変満足した。

五局里の建設主

1974年5月のある日、五局里（オグク）を通りかかっていた金日成主席は車を止めさせた。

村の全景を眺めていた主席は、藁葺の家が散在していて耕地整理ができず、道路や河川も十分に整備されていないと気遣わしそうに言いながら里の幹部に聞いた。

「レンガや木材がなくて建設ができないんですか。さもなければ農村建設隊がないんですか」

主席は、五局里に住宅を建ててやるべきだと、再三強調した。

翌日、主席は信川（シンチョン）地区協議会を招集し、五局里の文化住宅建設問題を討議した。

主席は里の幹部に、建設資材や建設機械、運輸機材など何でも提供するから1000世帯を目標にして五局里を近代的に建設しようとし、鉄道と載寧江を利用して建設資材を運ぶ対策まで具体的に講じた。

「五局里の建設は誰が責任をもって行うんですか」

郡の幹部が建設隊しかないと答えた。

主席は、それでも建設を責任をもって進める人がなくてはならないとし、「郡機関所在地の建設は最後に回しなさい。まず、藁葺小屋を取り払って建設をしなければなりません。とにかく、五局里に1000世帯を建てることにしましょう。……そうす

れば農民が喜ぶでしょう」と言った。

主席は、建設隊は五局里建設隊と命名し、これから工事を始めて一年内に完成しようと言った。

「私が五局里の建設主になります」

瞬間、場内は大きな感激に包まれた。

首都から遠く離れた平凡な農村の建設を自ら引き受ける主席の言葉には、かつて貧困と蒙昧、蔑みと迫害、ため息と涙の中で暮らしてきたわが国の農民に対する主席の温かい恩情がこもっていた。

かなえられた願い

1974年5月のある日、金日成主席は新たに製作した田植機の試運転を視察すべく、松新(ソンシン)協同農場(当時)を訪れた。

主席はあぜ道に並んでいる田植機を見て、田植えどきに機械が水田にはまりこむことはないのかと農場の農産技師に聞いた。

農産技師は規格化された水田を指し、あの水田は代かきをしてから5日が経ったので田植機がはまりこむようなことはないと答えた。

主席はこう言った。

——田植機がはまりこむことがないようにするには、5日ほど前に代かきをして泥を沈殿させなければなりません。その前に田植えをすれば、田植機がはまりこむだけでなく、苗を正しく移植することもできません。田植機は泥水の中で作業するだけに、いくら見栄えがよくても苗の移植が満足にできず、またしばしば故障を起こしては役に立ちません。

主席は長時間をかけて田んぼを行き来しながら、10余台の田植機の作動ぶりをつぶさに確かめ、機械をさらに完成するように細かく指導した。

腕時計で機械の速度を推し量り、水田の端まで全部機械で移植できるように作業方法も教え、10余台の機械が移植した苗を抜いて来させて本数を確かめながら、科学的で合理的な株当たり本数も教えた。

この日、主席は田植機の運転工や苗供給手を呼んで彼らの意見も聞き、田植機運転工をはじめ田植えをする人びとに色眼鏡を供給する対策まで即座で講じた。

主席は青々と変わる田野を感慨深く眺めながら、このように述べた。

——私は一生農民を骨の折れる労働から解放するために苦心しましたが、今日になってその願いがかないました。

かつて、私が日本帝国主義に抗して山で戦っていたときは、雨露に濡れ野宿しながら安らかに過ごすことができませんでしたが、今日は私の願いがかなったので枕を高くして眠れるようになりました。

農民を骨の折れる労働から解放させようとする主席の願いは、まことに遠大かつ熱烈なものであった。

記念写真

書院(ソウォン)が原の稲が枝分かれをしてぐんぐん伸びていた1976年6月のある日。

現地指導の道で安達守(アンダルス)管理委員長を見分けた金日成主席は、車を止めさせた。

「今年度の作柄はいかがですか」

主席はやさしいまなざしを安達守に向け、親しく尋ねた。

「上出来です」

「機械で田植えをしたのはどのくらいですか」

「今年は苗を丈夫に育てられなかったので、機械で田植えをしたのは3パーセントしかありません」

苗を丈夫に育てるべきだと言った主席は、「稲わらを刻み、尿素と混ぜ合わせて腐植土を生産することはできませんか」と両手でそのまねをして見せた。

石灰窒素さえあればよく腐るという彼の答えに、主席は満足し、「安達守さんは農業博士です。この人ができるということは全部可能です。このように話し合うと、稲わらで腐植土を生産する方法も出るのではありませんか」と彼をたたえた。

安達守の顔をしげしげと見ていた主席は、「お年はいくつですか」と尋ねた。

今年65歳だという彼の答えに主席は「今後10年はもっと仕事を

しなければなりません」と言った。

そして、別れを惜しむ安達守の気持ちを察し、久しぶりに会った記念に写真を撮ろうと言った。

主席は自分の左腕で彼の右腕をやさしく組み、満面に慈愛深い笑みをたたえた。

そして、陽光に向かうよう、手ずから彼の体の向きを変えさせもした。

写真を撮ってから主席は、「次世代のためにも農場を立派に整え、営農実績を上げるべきです」と語った。

主席は農場を去った後、安達守の健康を気遣って平壌に来て特別治療を受けるようにし、彼を乗せて来るよう乗用車まで差し向けた。

主席は、彼が平壌で治療を受ける期間にも数回にわたって病院の責任幹部に電話をかけ、病院の医療陣が真心を込めて治療して彼の健康を早く回復させるべきだと言った。

彼が治療期間、営農状況に気を使って夜も眠れないということを知った主席は、病院の一幹部を現地に派遣して作柄を把握させ、彼に伝えるようにした。

70余日後に病気をきれいに治した安達守は健康な体で農場に戻ってきた。

安達守は、主席と一緒に撮った記念写真を仰ぎ見ながら目をうるませた。

島村の慶事

1977年4月のある日、价川郡桃花(トファ)協同農場（当時）に慶事が生じた。

金日成主席が島を訪れるという知らせが届いたのである。

桃花島の住民は未明から起きて心を弾ませ、晴れ着姿で主席を待っていた。

ここには特別ないきさつがあった。

2年前、桃花島は洪水に見舞われ、長時間の豪雨で増えた川の水が島の堤防を越え始めた。

洪水によって島民は生死の岐路に立たされた。

そのとき、空からプロペラの轟音と共に飛んできた3機のヘリが島に着陸した。

桃花里の島民が危険にさらされているという報告を受けた主席が、即時にヘリと水陸両用車を送って彼らを救助するよう計らったのである。

その後、主席は桃花里の住民が永遠に水害をこうむらないように、堅固な橋を架ける措置を講じた。

しかし、桃花里の住民は主席が最初に橋を渡る前には絶対に利用することができないとし、橋をきちんと管理するだけで、相変わらず船で川を渡っていた。

この報告を受けた主席は、桃花里の農民の願いなら道が険しく

ても行ってみようとし、新しく架けた「恩徳橋（ウンドク）」を見て回ることにした。

主席の車が橋のたもとに到着すると、人びとは万歳の歓呼の声を上げた。

橋に立って桃花島の全景を見渡していた主席は、恩徳橋が新設されて桃花里の人びとの通行が便利になった、今後桃花里から平安北道寧辺（ニョンビョン）郡へ行く橋をもう一つ架ければとても便利であろう、と言った。

そして、价川郡にはいまなお未開墾地がたくさんある、ここに来る途中に見ると堤防のそばに水溜りが多い、それを埋めると新しい土地がいくらでも得られる、と語った。

周辺を見回した主席は、雨が多く降ると川の水がどこまで増すのかと聞いた。

ある幹部が島の周りに堤防を築き、橋を架けたので大水に見舞われても大丈夫だと報告した。

島の周辺を眺めていた主席は、桃花里は野菜の栽培に最適である、桃花協同農場で野菜の栽培に力を入れれば、价川地区の労働者、事務員に野菜を切らさず供給し、農場員の現金収入も高めることができる、農場で郡内の労働者、事務員の援助を受けて野菜畑の灌水工事を推し進めればすぐ終えることができる、また井戸を掘ることなく、清川江の水を引けば畑にいくらでも灌水することができる、と語った。

こうして、昔から一本の大根さえ満足に食べられなかった桃花里に野菜栽培の新しい歴史が開かれるようになった。

機械化家庭

1978年1月、平壌では金日成主席の臨席の下に全国農業大会が開催された。

大会には農村の平凡なトラクター運転手夫婦も参加したが、妻は大会で討論することになった。

演台に立った彼女は、高鳴る胸を抑えることができなかった。

彼女が討論を始めたとき、場内に主席の慈愛深い声が響いた。

「彼女の夫もトラクター運転手であり、二人の義弟夫婦や義姉夫婦、また他の義弟もみなトラクター運転手です」

主席は、家族の9人がトラクター運転手として働いていることを大会の参加者に紹介し、これこそが機械化家庭であり、農村労働者階級のモデル家庭であると満足の意を表した。

主席は、彼女に討論を続けるようやさしく言った。

彼女は喉を詰まらせて、自分たちが働いている分組でも金日成主席の教え通りに農作を立派に営んでかつてない大豊作を収めたことと、年初から営農準備のための作業で家庭のトラクター運転手9人が自分の耕耘作業計画を超過遂行しながらも多くの燃料油とトラクターの部品を節約したことについて主席に報告する気持ちで語った。

「彼女の夫は幹部壇に座っていますかね」

主席が幹部壇を見回しながら聞いた。

場内は水を打ったように静まり返った。

ところが夫は、すぐに立ち上がって主席に答えることができなかった。

主席が女性トラクター運転手の討論を聞きながら、夫である自分を呼ぶとは夢にも思わなかったからである。

夫はそばの人に言われて急いで立ち上がった。

主席は「あの人が夫で、彼女は妻です」と、大会の参加者にトラクター運転手夫婦を紹介した。

場内には万雷のような拍手がとどろいた。

主席は、討論を続けるようにと言った。

彼女は、これまで家族の全員がトラクター運転手になって農村機械化の先兵として働いてきたことを語った。

夫婦が13年間、トラクターを共に運転しながら一件の故障もなくきれいに管理してきたことを言ったとき、主席は非常に満足して自ら拍手を送った。

——なんと素晴らしいことでしょう。13年間、一件の故障もなく運転してきたのは非常によいことです。

主席は、このような英雄たちがいるがゆえに、わが共和国が強大かつ富強であり、わが農村が盛んに機械化されつつあるとほめたたえた。

大会が終わった後、トラクター運転手夫婦と二人の義弟の夫婦、義姉夫婦は主席から新しいトラクターを贈られた。

稲作での革命

1987年10月のある日。

金日成主席は、ある農場で新たに改造した稲の直播機を見るために、農場の試験圃場に出向いた。

代かきの終わった試験圃場と稲の取り入れ最中の田畑を眺めていた主席は、試験圃場を指しながら水をどのぐらい入れれば良いのかと聞いた。

――直播機で種を播くときには、水田に水を少し入れるのがよいです。水田に代かきをして沈殿物が沈んだ後、水を少し入れると、直播機の腹面に泥がつかず、よく滑ります。

そして、機械がある田の堤に足を運んだ。

稲の直播機を注意深く見た主席は、機械の作業様子を見ようと言った。

しばらくして、直播機が単調な音を響かせながら稲の播き付けを始めた。

稲播種機の作業の様子を眺めていた主席は、手を上げて機械を指しながら、稲の直播機は今のように田植機の腹面をそのまま利用して製作するのが良かろうと言った。

そして、種を播くときには機械で田植えをするように、水田の周りに機械が一度回ることができるように空間を置いて内から種を播き、その空間は最後に回りながら種を播くとのことですが、

空地が生じないようにすべきだと言った。

主席は、機械がすでに種を播いた所と播いている所を指しながら、あそこは稲の種子が密であり、ここは疎らである、田植えをした水田に欠株があると補植が可能であるが、直播きをした水田には補植が不可能である、と言った。

主席は、「稲の直播機が種を均一に播いていませんが、それを協同農場が受け入れて利用する過程でさらに研究、完成すべきです」と述べた。

稲の直播機の作業様子を長いこと見つめていた主席は、これくらいなら結構だ、立派に作ったと満足げに言い、始終明るい微笑をたたえていた。

現地で見たトラクターの試運転

1988年9月初めのある日、金日成主席は、某トラクター工場で生産したトラクターを見るために現地へ出向いた。

トラクターの機関部の覆いに手を当てて、性能や長所などを聞いた主席は、自らトラクター運転室のドアを開け、運転席とハンドルが運転に便利なのかを確かめた。

主席は、トラクターを立派に製作したと評価し、エンジンをかけてみるようにと言った。

やがて、トラクターのエンジンの音が響いた。

主席は、運転手にトラクターの上部と後部のドアを開けてみるようにと言い、手で円を描きながら広場を何回か回って見るようにと指示した。

運転手は、主席に工場の労働者階級が製作したトラクターの試運転をご覧に入れることになった喜びを抱いてトラクターを運転した。

トラクターが広場を2回回ったとき、主席はトラクターを止めさせた。

運転手がエンジンを止めると、主席はもう一度エンジンをかけてみるようにと言った。

再びトラクターのエンジンの音が響き渡ると、主席は、自身は早くからトラクター運転手が運転室でエンジンの始動ができるよ

うに強調してきたとし、次のように述べた。

「……トラクターの運転室上部の覆いを開閉できるようにしたのはよいことです。運転手が冬には寒がらず夏には暑がらずにしたのもよく、運転室でエンジンを始動できるようにしたのも非常によいことです」

そのうち時間はかなり流れ、運転手はトラクターを運転して広場を出た。

主席のもとを離れるのを残念がりながら後ろを振り向いた運転手は驚いた。

主席が乗用車の中で、前で走っている自分を見守っていたのである。

（主席、私がどうして先に……）

運転手がトラクターのスピードを落とそうとすると、主席は車窓から手を振りながらそのまま前で走るようにした。

4キロぐらい走って稲穂の波打つ農場の田野が見える所に着くと、主席はトラクターを止めるように合図した。

明るい微笑をたたえた主席は、運転手に手を振りながら再び現地指導の途についた。

農場の田野に響き渡るトラクターの力強いエンジンの音にも、農民を骨の折れる農作業から解放させようとする主席の献身の労苦がこもっている。

田畑を離れなかった理由

1991年8月のある早朝、金日成主席は朝鮮の最北端に位置している穏城（オンソン）郡の王在山（ワンジェサン）協同農場（当時）を訪れた。

笑みをたたえて車を降りた主席は、農作を立派に営んだ、見なくても作柄が上々であることが分かる、と大いに満足した。

上出来の稲の作柄を眺めながら重ねて満足を示した主席は、トウモロコシの畑に足を運んだ。

負けず劣らず一様によく出来たトウモロコシ畑から目を離せずにいた主席は、トウモロコシの作況が良いとして満足を示した。

主席は、よく熟れたトウモロコシの実を指しながら取って来させた。

随員がトウモロコシの実を二つ取って来て皮をむいた。

それを受け取って注意深く見ていた主席は、穂先まで実入りが良いと満足げに言った。

主席は、この農場のように農業を営めば白米のご飯に肉汁は問題ないと言い、坪当たりの株数を尋ねた。

「株数が多くも少なくもなく基準に定められた通りだ。このたびここに来て気持ちが良い。ここを離れたくない」

主席は、王在山協同農場のようにトウモロコシがよく出来ている農場は初めてだと、楽しそうに言った。

「王在山協同農場のトウモロコシの作柄が上々です。私がこ

れまで見たトウモロコシ畑の中で7号農場の畑を除いてはこのようにトウモロコシの出来が良いのは初めてです。トウモロコシの実入りが結構です」

この日、長い時間をかけて大豆畑とモロコシ畑をもれなく見て回った主席は、再びトウモロコシ畑を眺めながら、トウモロコシの作柄が上々だとたたえた。

「今後、咸鏡北道の営農状況を確かめるには、王在山協同農場に来るのが良いでしょう」

トウモロコシの作柄を眺めているときにも、人民の幸福が大きくなるのがあまりにもうれしくて、主席は畑を離れようとしなかった。

延白平野の農業「顧問」

1993年8月末のある早朝、金日成主席は延白(ヨンベク)平野の豊作を確かめるべく、白川(ペチョン)郡水源(スウォン)農場を訪れた。

主席は朝露に濡れたあぜ道を歩いて道路沿いの水田に近寄り、稲穂に目を凝らした。

そして、作柄が上々だとして農場が収めた小さな成果をたたえ、自分はたいそう満足したと重ねて言った。

主席は、畑から取ってきたトウモロコシの実を手にして、トウモロコシがよく熟れたと大喜びし、この農場では稲ばかりでなくトウモロコシの出来も上々だと重ねてたたえた。

主席は、この地方で気温が高いときの水温について聞き、「白川郡のように夏に田の水温が高くなる地帯では水を入れ替える必要があります。

稲は生物学的特性からして昼間は暑く夜には涼しくてこそ、分けつがよくなり、早く育ちます」と言い、この時期に水を入れ替えないと、人間が酷暑の折に綿布団をかぶって寝るのと同じだと、たとえを用いながら分かりやすく説明した。

ついで主席は、白川郡錦城(クムソン)協同農場（当時）を訪れた。

主席は「稲の作柄が非常に上々です」と言い、長いこと田野を眺めた。

主席は、延白平野の農作が良好だと聞いてここに来たが、本

当に農作が上出来だと喜びに溢れて言い、籾米のヘクタール当たり収量はどれぐらい見込んでいるのか、稲の品種は何であり、肥料はどれほど施したかなど、農作業について詳しく聞き取った。

主席は、農場の幹部にどうやって今年の作況がよいのかとやさしく聞いた。

幹部は、主席のお陰で肥料と農薬、用水、電気が優先的に配られて作柄がよくなったと答えた。

主席は、再び延安(ヨンアン)郡梧峴(オヒョン)協同農場（当時）を経て天台(チョンテ)協同農場（当時）へ現地指導を続けた。

果てしなく広がった延白平野、どこを見回しても重く垂れた稲穂がそよ風に揺れていた。

主席は天台協同農場のある水田の近くに車を止めさせた。

ちょうどそのとき、そこに出ていた農場の幹部が主席にお辞儀をした。

彼は、延白平野の農民の切々たる願いです、農作を立派に営むからこれ以上主席が険しい農村の道を歩まないでほしいと言った。

主席は豪快に笑い、このように現地に出向いてこそ、指導もよくできるし、健康にもよいと言った。

主席は、満足な表情で田野を見渡しながら、本当に延白平野が気に入ると言った。

時間は休みなく流れ、主席が最後に立ち寄った青丹(チョンダン)郡清井(チョンジョン)協同農場（当時）の現地指導を終えたときは昼下がりの頃であった。

主席は同行した幹部に、自分は黄海南道に来て農業「顧問」を務めれば良かろうと冗談交じりに言った。

主席は、来年に豊作をもたらすならばまた訪ねて来るという約束を残し、農場を後にした。

＊　＊　＊

1994年6月のある日のことである。

金日成主席は平壌市のある農場の野菜畑を訪れた。

車を降りて青々と育っている野菜を満足げに眺めていた主席は、ゆっくりと野菜畑の真ん中に足を運んだ。

畑には、手軽な灌水器が設置されて野菜畑に散水をしていた。

主席はいたく満足し、後ろに手を組んでずっと立っていた。

しばらくして、近所の果樹園から農場の幹部が駆け付けて来た。

主席は彼の手を取って「ご苦労さんです。野菜がよくできています」と言った。

そして、みなさんが私の気に入る灌水方法を考え出したと非常に喜んだ。

「みなさんが畑にＹ型棒ぐいによる灌水をしましたが、結構です。

……

このような方法で散水式灌漑システムを導入すれば、少ない資材と労力をもってでも現存の灌漑施設を利用していくらでも全てのトウモロコシ畑に灌水をすることができます」

主席は、広い野菜畑を見回した。

野菜畑の道路の向こうの小さな丘陵には果樹園が広がり、かぐわしい果物の香りが風に乗って漂って来た。

主席はこの日、Y型棒ぐいによる灌水器を畑によく設置し、それを全ての農場に導入すべきだと再三強調し、しばらく道端に立って果物が実りつつある果樹園と、慈雨に濡れた野菜畑の景色を満足げに眺めた。

ここを離れるのが惜しいかのように何度も歩みを止めていた主席は、やがて、農場の幹部たちと別れのあいさつを交わした。

「さあ、お元気でね」

主席はやさしい言葉を残し、畑を後にした。

この農場の現地指導が、主席の最後の現地指導になろうとは誰も知らなかった。

このように金日成主席の一生涯は、絶え間ない現地指導の途上で流れた。

田野のこだま

執　筆：李正男、朴哲俊

編　集：安秀英

翻　訳：金光哲

発　行：朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社

発行日：チュチェ113(2024)年6月

ㄱ-240880162893

E-mail: flph@star-co.net.kp
http://www.korean-books.com.kp

朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
チュチェ113(2024)
ISBN 978-9946-0-2352-6
9 789946 023526